

宅地造成事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

# 北垣外遺跡

1992年11月

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

ページ 目	行	「北陸外産物」正誤表	
		「誤」	「正」
7	29	1994 第9号社	1992 第2号社
12	10	100m	100cm
18	6	ナ子製菓	ナ子製菓
34	9	後編3頁	後編2頁
36	6	大坂府陶村	大坂府陶造

宅地造成事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

# 北垣外遺跡

1993年11月

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

## はじめに

北越外灘群集落調査委員会 長野県上伊那郡南箕輪村教育員 長谷部 五郎

平成2年夏、地主の有賀清氏より「自宅庭地を造成したいので北越外灘群調査をしてほしい」との申し出がありました。

造成計画がはじまりました平成2年10月、県教育委員会指導主事市沢実利氏、日本考古学協会会員津茂純氏、村文化財専門委員佐沢貞氏、有賀清氏に集まっていただき、協議の結果、「まず群集調査をし、その結果によって築集調査の計画を立てて実施する」とことになりました。

12月2・3日、林氏の指導で試験が行われ、在り跡・表土・土層・陶器片が出土しましたので、関係者によって12月14日協議しました。その結果、記録保存のために調査することになりました。なお予算については調査委員長を基軸として行ないました。

築集調査決定のあと、調査団員の林氏が初めて民間入組となりましたので、急遽木下平八氏に調査団員代理をお願いして進めることになりました。そして、木下氏指導のもと、平成3年4月4日から調査が始まり、4月17日に築集調査は終わりました。

今回調査者の協力によって、北越外灘群の内容が明らかになり、報告書が出されることになったことは、大きな喜びであります。

北越外灘群集落調査及びその報告書の刊行によっては県教育委員会市沢実利指導主事、津茂純調査団長及び調査員、村文化財専門委員の方々、地主の有賀清氏、協賛作業にご協力くださった村内の方々及び村当局に、大変お世話になりました。わけでも、木下平八氏調査員には感謝念として報告書完成まで、一貫して中心になって協力いただき感謝のほかはありません。ここに、各位に対して深甚なる敬意を表するとともに感謝申し上げる次第であります。

## ごあいさつ

土地所有主 南箕輪村北越 有賀 清

私が生まれ育った屋敷の北越外は、天竜川の河原段丘状地帯の平面に位置する。

現在も、中河原の水田地帯が眼下に見下るせ、古代の耕作遺跡を中心とした頃の住居地として、遺跡の宝庫地帯であったともうかがえる。この北越外は、私が築集後外地から引き抜けてきて、遺跡であったものを、築集地と水田につくり直し、耕作を続けてきた家で土には数々の土層の痕跡、石器が見つかり、その程度保存もし、又、築集地の天ดิน層作業時では、在り跡とも思えるが石、瓦、灰等も等間隔で見つかったりして重宝ものである。江戸時代から明治時代であろうと思われる了水運地帯跡らしいものも1ヶ所で見つかり、昭和30年頃に、当時南箕輪中学校の教諭であった、福沢一郎先生（伊豆赤山寺住持）にはご指導にあずかり、他方私なりに保存をしてきたつもりであった。（平成1年調査委員会委託報告書）

今回の遺跡の発掘調査によって調査団員の林茂雄先生、調査員の木下平八郎先生及び村文化財専門委員、教育委員会の各位には、随々お世話になりました。末尾ながら厚くお礼申し上げます。また、築集調査によってもたらされた先祖の遺産が更に解を明かされて歴史に輝き續がれて頂ければ誠に幸いです。

## 例 言

1. この報告書は、長野県上伊那郡南箕輪村大字北郷所在の北郷外遺跡が、同の墓地所有者菅野真氏の自宅地造成事業により破壊されるため、原図者が遺跡の記録保存事業を村教育委員会に委託して実施した発掘調査の報告書である。(下記90,4記号地点)
2. 本報告書の整理は林道隆が行ない、編纂は林・木下の協力で行なった。
3. 本報告書は発掘調査によって検出された遺構、遺物をより多く図示することにより資料性において重点をおいた。文中図の欄外を「第1図」の欄外「図1」と表示してある。
4. 遺構の製図は、菅野真太郎・木下平八郎が行なった。縮尺は各図に示してある。
5. 土器・石器の写実、製図は木下平八郎が行なった。
6. 本報告書の執筆は、第1章、第V章は田島林茂樹、第II章、第III章、IV章は木下平八郎が担当した。及び製図図、写真、発掘記録保存資料は南箕輪村教育委員会に保管してある。
7. 写真撮影は、遺構、遺物共に木下平八郎が行なった。
8. 出土遺物は菅野真氏宅に保管している。広く活用されたい。



第2図 北郷外遺跡の地割(1:2500) ——遺構の配置

# 目 次

はじめに	南支那教育委員教育長 長谷部 五 郎	
ごあいさつ	遺跡地所有者 有 賀 國	
例 言		
目 次		1
神田前次・図説目次		2
第 I 章 遺跡の概況		3
第 1 節 位置及び地形・地質		3
第 2 節 歴史的背景		3
第 II 章 遺跡発掘調査の経緯		6
第 1 節 遺跡保存についての経緯及び調査経緯		6
第 2 節 保護体制		6
第 III 章 発掘調査の概要		7
第 IV 章 遺構・遺物		8
第 1 節 弥生時代の遺構・遺物		8
1. 第 1 号住居址		8
2. 第 2 号住居址		8
3. 第 4 号住居址		10
4. 第 9 号住居址		12
5. 第 9 号掘土内遺物		12
第 2 節 古墳時代及び平安時代の遺構・遺物		17
1. 第 3 号住居址		17
2. 第 6 号住居址		18
3. 第 7 号住居址		19
4. 第 8 号住居址		23
5. 第 6 号住居址		27
6. 第 10 号住居址		29
7. 第 1 号堀立柱式遺物址		29
8. 遺構発出土遺物		32
9. 土師器遺構の未調査について		32
第 V 章 結 語		34
1. 弥生時代中期の集落について		34
2. 古墳時代の遺跡発見について		35
3. 古墳時代前期の土器について		36

目 次	目 次
第1回 北越外遺跡位置圖……………4	図版1 遺跡位置……………40
第2回 北越外遺跡遺跡の地理一列頁下	図版2 第1号住居址……………41
第3回 北越外遺跡発掘区全図……………5	図版3 第1号住居址土器……………42
第4回 第1号住居址実測図……………9	図版4 第2号住居址及び土器……………43
第5回 第1号住居址土器実測図……………10	図版5 第4号住居址……………44
第6回 第1号住居址土器実測図……………11	図版6 第1・4号住居址土器……………45
第7回 第2号住居址実測図……………12	図版7 第9・10号住居址存在土器……………46
第8回 第2号住居址土器実測図……………13	図版8 第3号住居址遺物出土状況……………47
第9回 第2号住居址土器実測図……………13	図版9 図内製土製品……………48
第10回 第4号住居址実測図……………14	図版10 図内製土製品 (内器)……………49
第11回 第4号住居址土器実測図……………15	図版11 第3号住居址出土土器……………50
第12回 第4号住居址土器実測図……………15	図版12 第3号住居址出土土器……………51
第13回 第9・10号住居址土器実測図……………16	図版13 第5・7・8号住居址……………52
第14回 第9号住居址実測図……………17	図版14 第5号住居址……………53
第15回 第3号住居址カマド実測図……………19	図版15 第3号住居址土器……………54
第16回 第3号住居址土器実測図……………20	図版16 第3・5・10号住居址遺物……………55
第17回 第3号住居址土器実測図……………21	図版17 第6号住居址遺物……………56
第18回 第3号住居址土器実測図……………22	図版18 燗甕炉・第1号燗甕……………57
第19回 第5・7・8号住居址実測図……………24	図版19 燗甕炉出土遺物……………58
第20回 第5号住居址土器実測図……………25	図版20 土器器類構成……………59
第21回 第7号住居址遺物実測図……………26	図版21 土器器類構成……………60
第22回 遺跡外の土遺物実測図……………28	図版22 土器器類……………61
第23回 第10号住居址実測図……………27	図版23 青島産鉄を原料とした……………62
第24回 第9・10号住居址土器実測図……………28	
第25回 第6号住居址実測図……………28	
第26回 第6号住居址土器実測図……………28	
第27回 第1号燗甕址実測図……………21	
第28回 第1号燗甕址土器実測図……………31	
第29回 遺跡外の土器実測図……………25	

## 第1章 遺跡の環境

### 第1節 位置及び地形・地質 (第1図、第2図)

北越外遺跡は、上伊那郡高箕輪村大字北越2641〜2646番地に位置する。

交通上からは、J.R.・新潟線北越駅を挟む西側の段丘面上の棚田及び宅地一帯であり、遺跡の範囲は、棚田地点を北端として南北300m、東西100m、約30,000㎡を測る。

この段丘を南側段丘とよぶ(村置)が地質学的には「新潟土石流成層」と称され天竜川層の上層部を形成し、段丘地形から見れば天竜川の流床より数えて二段目の段丘面である。一段目の低位段丘は遺跡の北西近く僅かに残され、棚田面の面となり比高10mを測る。

南側段丘は、この位置で天竜川に崖原に垂直に東方に突出し、箕輪町木下附近で約1.5km、北島から北越まで南北約1kmの、広い段崖を形成する。これを箕輪段地帯と仮称する。

本遺跡は、箕輪段地帯の崖頂部を貫く段丘面に位置し歴史的な街道を占めている。

北遺跡地の地質は、五つの層の堆積から成る。

第I層 地表の礫土層で厚さ20cm内外の黒褐色土。

第II層 黒土層で厚さ50cm内外、腐植土層の堆積したものである。

第III層 不整合層で部分的である。腐植の褐色黒土層で厚さ2m内外に堆積する。

第IV層 黄褐色粘土層で、厚さ80cm内外のアブラ層で耕作コーム最上層のものである。

第V層 天竜川層で厚さ20m内外を測る。腐植面成層を多く含むが同質化が進んでおり、北側段丘の主要形成層である。

箕輪層の黄褐色腐植層の堆積は、弥生時代末期に西方の棚田段丘(種子巻段丘)村置宅地附近が大規模し、その流れが箕輪層を形成した。第IV層が遺物の包層であった。

### 第2節 歴史的背景

高箕輪村置域内には、遺跡が多く存在するので北越外の周辺1kmの範囲内で示す。(第1図)

1. まず、遺跡域下に展開する天竜川に崖原は、昭和30年代の水害造成時におびたしい本製粘土質、石層が出土した。箕輪木田遺跡地帯の南端である。この上の段丘面を占める本遺跡は縄文時代以来、各時代に互る大遺跡である。
2. 北越地区内の南側段丘面には、秋田社(縄文・弥生)・内城(縄文・古墳古)・東坂丹(弥生・古墳)・西坂丹(縄文・弥生・平安)が連続状態で分布する。
3. 北越する直の東地区は、南側段丘面は全く盛んな低位段丘と高位の種子巻段丘が連続しており、この段丘面に多くの遺跡が展開する。天竺(縄文・弥生・古墳・平安の各遺跡)・堀内(縄文)・聖宮(縄文)・山の神(縄文・弥生)・高尾敷(縄文)・向坂内(縄文・弥生・古墳・平安の集落跡)で、面積大きく密度が高い。
4. 北越する八景地区は、丸山古墳(千待勾玉・直刀出土)その後の後遺跡が密集している。



图1图 北平外城街道图 (比例尺=1:25,000)

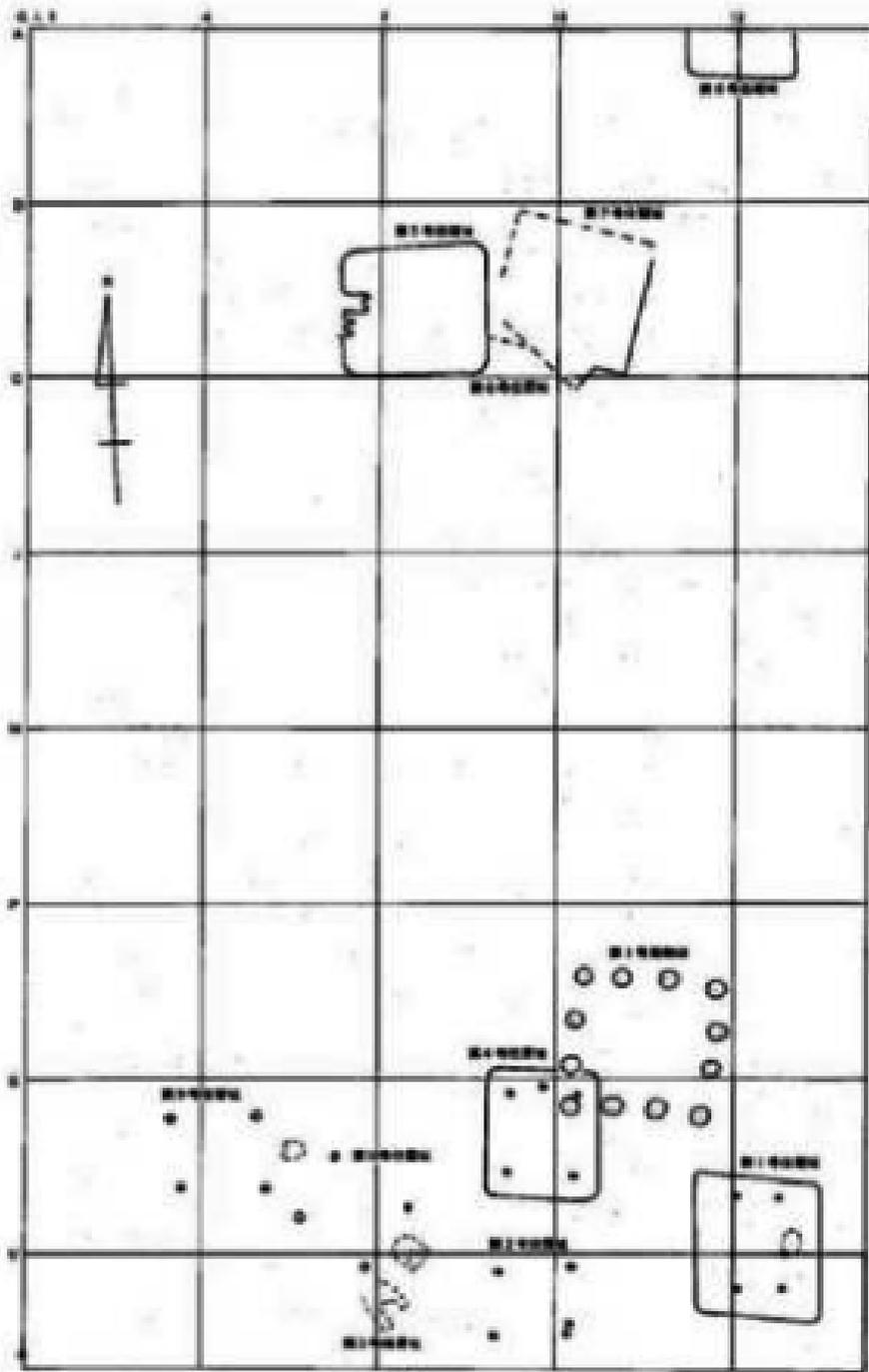


图 3 图 尚德地金矿图 (1:200)

## 第1章 遺跡保護措置の経緯

### 第1節 遺跡保存についての経緯及び 調査経過

- 平成2年8月25日 土地所有者有賀武夫より宅地造成計画に伴い調査依頼があった。
- 10月16日 市教育委員会、林次郎氏、教育委員会に於て協議。費用は所有者有賀氏負担とする。
  - 11月14日 有賀氏、林氏、調査方につき協議。事業用協議。
  - 12月1日 発掘地区、グリット設定。
  - 12月2日 調査区始成、試掘開始。
  - 12月3日 25グリット調査終了。敷石以外の遺構、遺物出土。
  - 12月14日 調査区会議。記録保存必要を決定。
- 平成3年4月4日 調査開始。表土剥ぎ。
- 4月5日 試掘。グリット設定。発掘作業開始。
  - 同4月12日 発掘作業終了。各遺構調査。
  - 4月14日 有賀氏、調査区協議。
  - 4月17日 全体調査。調査終了。
  - 同4月25日～5月17日 遺物整理及び調査
  - 同5月7日～同6月15日 資料作業
  - 6月20日 調査区、事業用協議。

### 第2節 保護措置

有賀氏宅地造成計画区域内は、今むを得ず、記録保存措置とすることに決定した。次い

で、地裁、北北外遺跡特別調査委員会を組織して発掘の執行に当たることになった。

委員長	長谷部五郎	教育長
委員	伊藤 高平	文化財専門委員
	唐沢 昌	●
	日戸 武彦	●
	唐沢 實	●
	佐久 義明	●
	吉田 友雄	●
	渡本 一徳	●
	原 剛夫	●
事務局	長谷部五郎	教育長
	丸山 隆志	教育次長
	藤沢 久人	社会教育課長
	横山 文男	社会教育課
	山崎 晴夫	社会教育課
	西中 豊	公民館立事
	北沢英太郎	社会教育立事(派遣)

また、考古学学術調査者の協力を得ず、次の通りの北北外遺跡特別調査団を組織し、発掘調査を推進した。

団 長	林 茂樹	日本考古学協会会長
調査員	木下平八郎	発掘調査学会員
	小町原 亮	上伊那考古学委員会
	伊藤 和也	成城大学考古学専攻学生

補助員 文化財専門委員 8人

発掘調査協会の會

藤岡好美、藤沢千孝、唐沢重美子、渡本浩子、宮城摩きい子、渡本たけ子、山田武三枝子、伊藤長子、唐沢高子、唐沢貞子、加藤美和子、渡本わかえ、加藤明彦、唐沢原直。

## 第三章 発掘調査の概要

遺構の平面図を基盤を用いて表土を削ぐことにした。発掘対象面積は1,100㎡を削り、南北約40m東西25mの範囲にする。(図3-2)

調査区の北西の角をグリットの基点とし、幅道に沿って東方向にアルファベット、東方向に番号数字を用い2m×2mのグリットを設定した。第1区は北に小道をはさんで隣接する敷地、第2区はA～K、1～15、調査区1～Y、1～15、調査区A～K、16～22、調査区1～Y、16～22のある地区にわけた。今回の調査では、既に発掘調査実施済みの敷地内側の水路を掘削した。A、E、I、L、Q、U、Wの1、9、13、17、21、25、29とQ内はトレンチ掘とし土層観察用とした。(図3-3)

発掘調査第1日 地層状態の確認と遺構の分布状態を調査した。

層位は、第1層粘土(黒褐色土)、第2層粘土(赤色土)、第3層腐植褐色土(腐植)、第4層腐植褐色土(ソフトフォーム)、第5層粘土(黒灰色腐植)であることを確認した。

各グリットを任意のサンプルを選び試験した結果、中世、平安時代、古墳時代、弥生時代に係る遺物の多数の存在を確認したので次第による調査を開始した。

第2日 調査区の南東部より、L1～15、U17、W17一帯に埋没する遺構群、第1号址、第2号址、第3号址の発掘に着手し、それぞれ遺物の出土を多く確認した。第3号址にはカマド2基が併設されていた。表土の存在部址との重なりと予想されたが確認できず掘削を止めた。

第3日 前日に引き続き調査を進めた結果、第1号址は弥生時代中期の竪穴式住居址、第2号址は、戦国期の開削工事による腐乱が及びられプラン形状は不詳、南西角部を遺構出土の遺物により、弥生中期の住居址と判別した。第3号址は、同じく開削工事による遺構の大部分は腐乱が及びされていたが、僅かに西壁の一部及び床面とカマド第3基が残存しており、表土上から遺物が確認状況で発見されたのは幸いであった。遺物の中に半島未知見の大型瓦片製土製品が検出され、調査区の関心を惹いた。第3号址は古墳時代後期の竪穴式住居址と判別した。

第4日 第1号址より第3号址の位置に隣接する第4号址、これより20mの位置、E15、E16に存在が確かめられた第5号址、第6号址の発掘に着手する。第4号址は弥生時代中期の竪穴式住居址、第5号址は古墳時代後期の竪穴式住居址で、第3号址と同じ時期でカマドが同じく2基併設されていることが確認された。

第5日 第1号址と第3号址との間に竪穴式居で確認された第9号址、第10号址の調査にとりかかると、また第5号址を重畳し掘削範囲で確認された第8号址およびこれと併り合う第7号址の調査を進めた結果、第7号址は、カマドが2基、西壁に沿って並設される第3号址大型住居址と同時期の竪穴式住居址と判別した。第9、第10号址は、開削工事による腐乱が甚大で、プラン形状は不詳で、土穴の一部が確認されたに過ぎず、床面レベルから出土した遺物により、第9号址は弥生中期の、第10号址は、平安時代後期の竪穴式住居址と判定された。

第6日 第3号址大型住居址のカマド周辺床面を北方に追索、調査したが、同じ住居址床面のレベルに埋没されたものと判定し、開口を東に向け、西壁に2基が並列してつけられたものであることを確認した。また、第4号址と併り合う住居址を確認し、3間×3間の竪穴式住居物で、古墳時代後期に所属するものと判別した。

第7日 終日全遺構の全期に着手した。

以上で現場における発掘作業を終了した。

## 第四章 遺構・遺物

### 第1節 弥生時代の遺構・遺物

#### 1. 第1号住居址(図4、5、6回 図版2、3)

G1W1に検出された住居址である。プランは南北方向に近くやや長い長方形で、規模は、東西4.3m南北4.8mを測る。壁高は水田造成時に土層を削り取られており、掘戻時の高さを知ることはできないが、東、南壁で4cm～14cm、西、北壁で15cm前後が検出しており、状態は良くない。

床面は、灰褐色土層を削り込んで作られており、度々赤土層が不連続である。

柱穴は、4本で東西が壁より1.5m前後中心線に近く、南北は、南壁が1.2m、1.2mを測り、柱間は、東西1.2m前後、南北2.8mで、間隔のみは10cm～20cmと不揃いである。

炉は、東側の柱穴を結ぶ線上のほぼ中央にあり、60cm×70cmの楕円形状に掘り込んでおり、壁が厚く考えられるが、壁土の断面に於ける下半部が正位に置かれている。内部に少量の灰と焼土が検出されており、大規模な施設であろうが、本址の西3mにある第4号址にみられる後期の進行する炊爨炉の穴部なすものかと考えられる。

東壁の北隅と、中央やや南寄りにも川原産石が壁に埋して立てた状態で置かれている。北西壁近くと、P4中央寄りに川原産石がある他には何もない。

遺物(図5、6・図版2、3) 遺物の出土は少ない。壁と土が主な層層である。

土層のみで多数の出土はない。壺(図5)は口縁部に溝状を施す形から胴部にかけて、櫛状工具で溝状部と波状部を、胴部から下半に箕形で櫛状部を組み合せ、釜(図5、図版5)は、大形(図5-1、図版3)のものは無紋で、胴下半部を大きく、表面は丁寧なへう状上で、内部は櫛状工具による調整で、焼成良好である。小形釜(図5-2、図版3)は、口縁部と胴下半部を大きく、表面に水磨が施されており、胴部は大部分の位置に4本の突起があり、焼成良好な釜である。釜(図5-1、図版3)は、胴部のみで、表面に3本の進行状線を入れ、その間に無紋状で生地の、その下部に大振り櫛状部を置き、その無紋状の隅を櫛状の突起状の状態で埋める。

炊爨炉(図6-1、図版3)は、壁の基部から立ち上りの部分のもので、表面をへう調整で仕上げた焼成良好な土層である。遺物よりみて弥生中期前半の時期である。

#### 2. 第2号住居址(図7、図版4)

遺構(図7・図版4)

本址は、G1W9に検出された住居址である。プランは水田造成時に土層を削り取られており東と南側は削作で、西側は第3号住居址の床面と重複しておりプランの正確性はわずかしい。床面は赤土じりの赤褐色土で凸凹があるが強く良好な状態の床面が柱間に残存している。柱穴は3本検出されたが、東南のP3・P4は他の3本より小さく柱間が20cmと狭くしており、普通の状態の柱穴のありかたと違うようだ。西側P3の北側近くに50cm×70cm

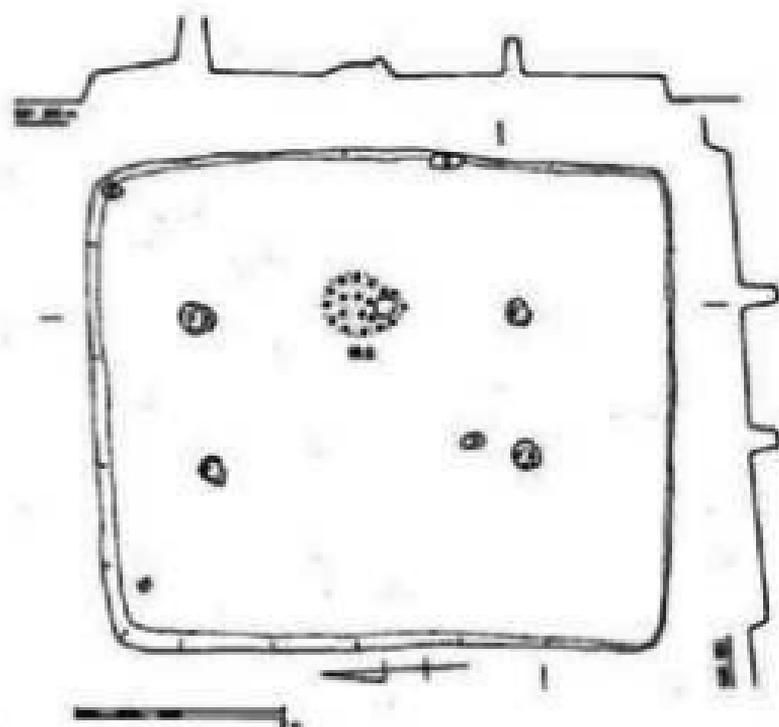
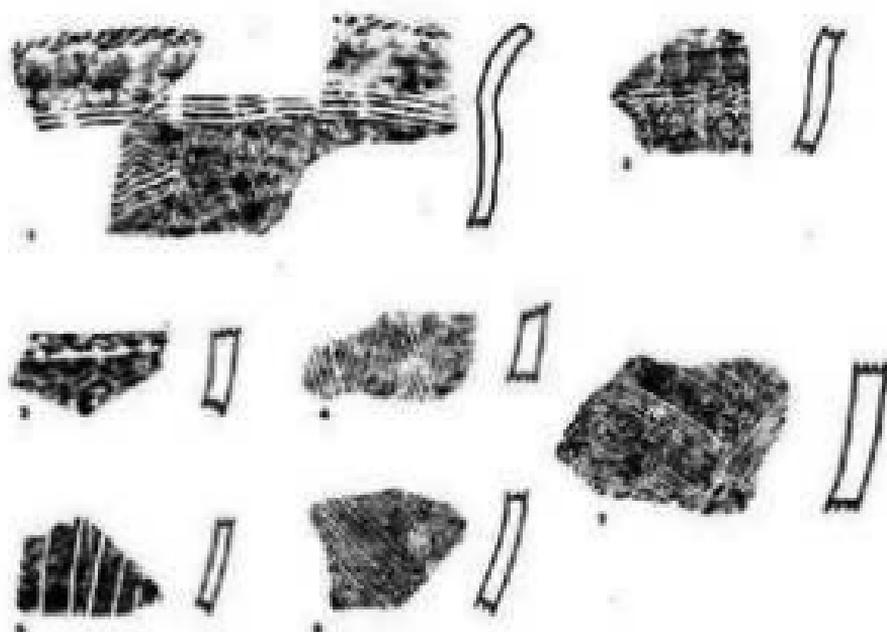


图4 第1号住居址平面图 (1:100)



第5図 第1号住居址出土土層断面（9-1:2）

の層内形状に粘土が残存しており、3層の層が三角形状に粘土の中に埋かっている。伊とするには柱穴の近くであり不自然である。遺物の出土は少ない。

土層（図5-1）は完形土層が1層ある。台の上に少量の粘土を塗り小形の器に仕上げた手づくね土層で、内外面両面から成り、内面は胎土が器底から露れずにはなれた状態がそのままだっており、外面は凸凹がはげしく荒らっぽいわ上の土層である。台付小型器（図5-2）は、台盤と立上りの1部分で土層は欠損している。器形のわかるものはこの2点である。

（図5）の1は、器底に縄紋を全面に施成し、灰に成層を認め、チタン結核状のあるもの、2は、縄紋状、3は、器下中部の成層の断面、4は、第3号住居址と重なるとおもはれる位置からの出土で、口縁部に縄紋を施成するもの、時期は、弥生中期末葉で、下伊原の住居址層行層である。

### 3. 第4号住居址（図第10-12図・図版5・6-2・8-1図）

遺構（図10図）本址はグラットT-9に検出された。プランは概長長方形で、面積は東西4、4m×南北5mを測る。壁高はこの住居址も水田造成時に創られており残存する壁は5m～12mと高くない。

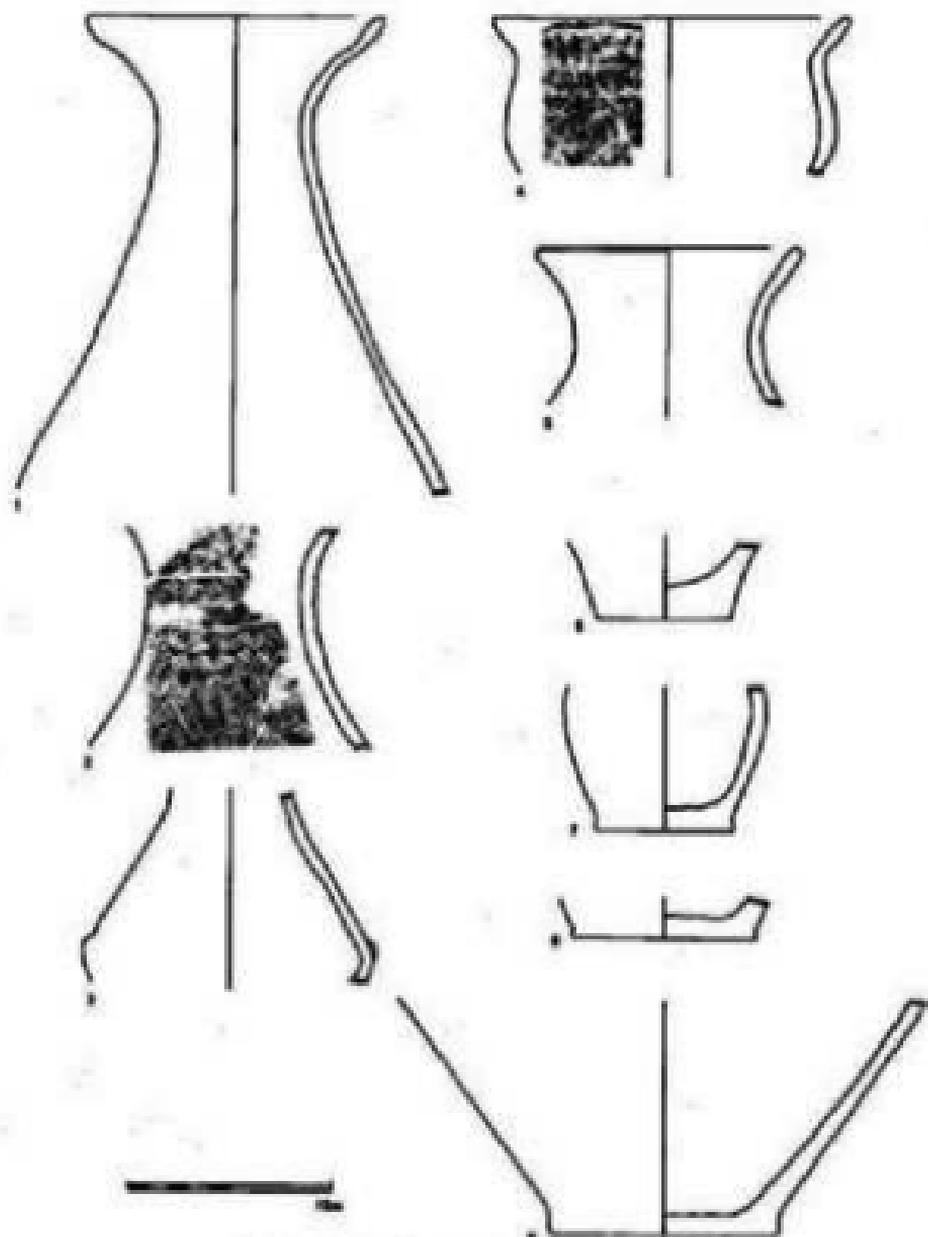


图4图 第1号纹饰出土土器 (2=1:2)

床面は砂質の黄色土で底はかく金箔面がとらえにくい。主柱穴は4本である。伊はP1・P2の軸線上中央北位寄りであり壁の基部を打抜いたものが埋没されており内外に土が透る。壁土中に腐蝕後受け込まれた土が数十箇所残存していた。

遺物 (図11・12・図版6-2・18-1) 遺物の出土は少ない。(11-1)は埋没が激化時には口縁部の1部が壊れていたが埋没時にはほぼ完全に近いものであろう。口縁部に刻み目と周紋を付けるものがある。(12-5)は第2号住居跡出土(9-1)と同一材質である。石器(11-3)は産製の様状石斧である。時期は弥生中期末と考えたい。

#### 4. 第9号住居跡 (図12・14-1・図版14-1, 3)

遺構 (図14) 床は、ドリット層-4に築出された。調査区西にありレベルの一番高い箇所である。水田造成時に遺土が90%から100%埋められた場所で、柱穴と伊の大穴が壊れた住居跡である。

プランは不明である。主柱穴はP1・2・4・5の4本と考えられる。P3・6・7はこの住居跡に伴うものかは定かでない。土の色のかわかぬ土がみられるので別の時期としたい。

造成時に土の移動による遺物の混在が認められ(図13)等にもみられるように壁の破片で、(赤土土器片加戸式煎薬に比定できる)が多く出土した。

(図14-1)、図上層までできるものはこの3点だけである。この遺物もこの遺構に伴うか断定できない。(図版7-2・3)

#### 5. 第9号遺土内遺物 (図13・14・29-1・2・図版7・18-1-3・19-4)

遺構については現場のところで説明する西住居跡共に調査区の西南隅近くにあり、第3号・4号住居跡に隣接しており、調査区中では埋没工事で最も削られた地帯であり上面の状況がひどい場所である。

遺物 遺土から弥生様式の土器片が出土した。(図13-1・2)は口縁部に周紋を施したその真下と頸部にボクン短冊状のあるもの。(図7・8)は口縁部に周紋を施したもので、(10-15)は4本か6本の櫛状工具による波状紋、縦線紋、横線紋を列等に施したものである。(3・4)は蓋で3は使用に多く見受けられる蓋の口縁部であろう。4は蓋部である。

(図22-1-6)はドリット出土である。1は短冊状の土器で、口縁部内外に口縁部に内打て櫛状工具で波紋が引いてある。この様な手法は数多い土器片の中でこの1点だけである。2は波状紋の複雑な組合せの紋様である。(29-1・2)は共に産製土器で、図上層光河能土器片である。1は第4位と第10位の間に、傾斜した状態で片面を削り取られた骨釘で出土した。骨から断片に削けて櫛状工具で縦線紋が削かれている。2は口縁部が大きく丹次する痕跡から断面に波状紋が削がれる。

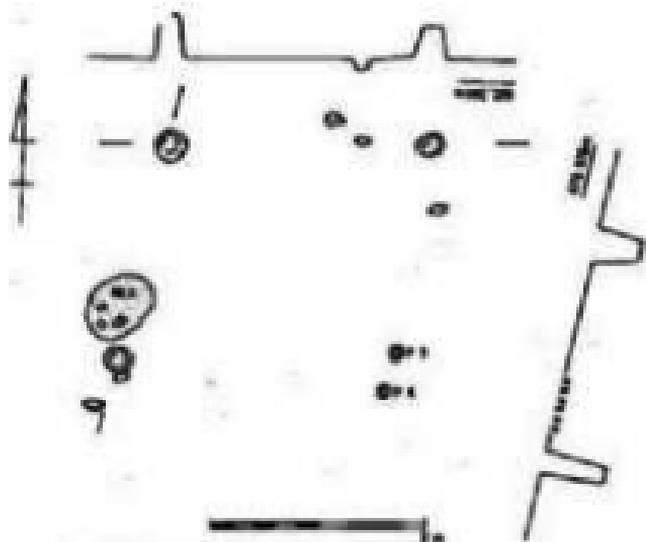


圖7圖 第2号位遗址平面图 (1:100)



圖8圖 第2号位遗址出土土層剖面圖 (1:2)

圖9圖 第2号位遗址出土土層剖面圖 (1:2)

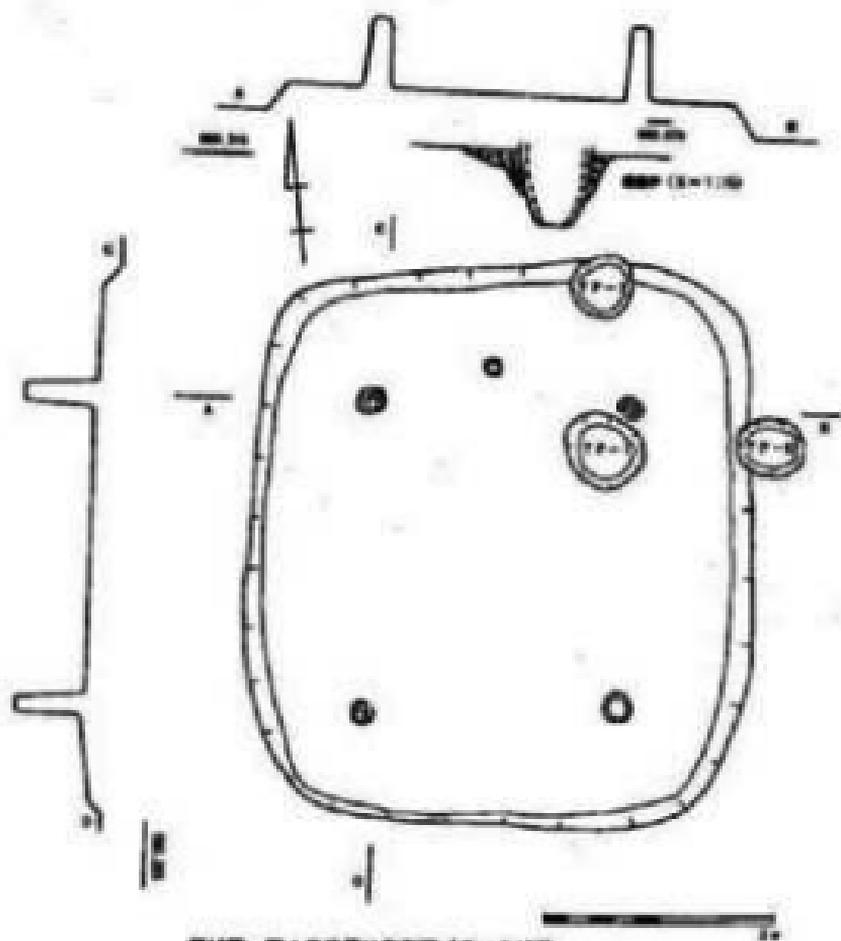


圖100 圖4 木質部橫切面 (1:100)

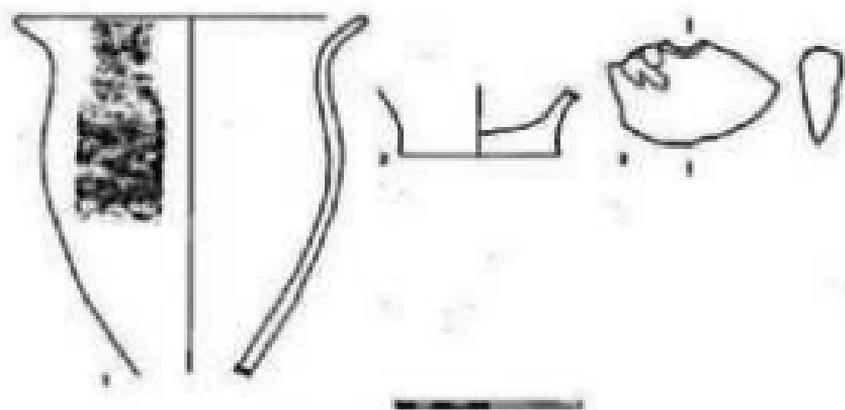


图11 第4号战国时期出土器物 (原=1:2)

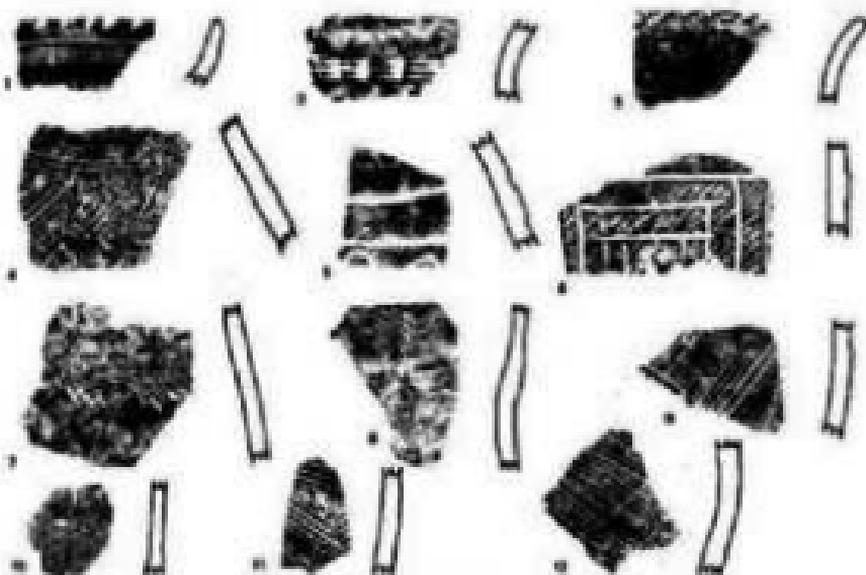


图12 第4号战国时期出土土器残片 (原=1:2)

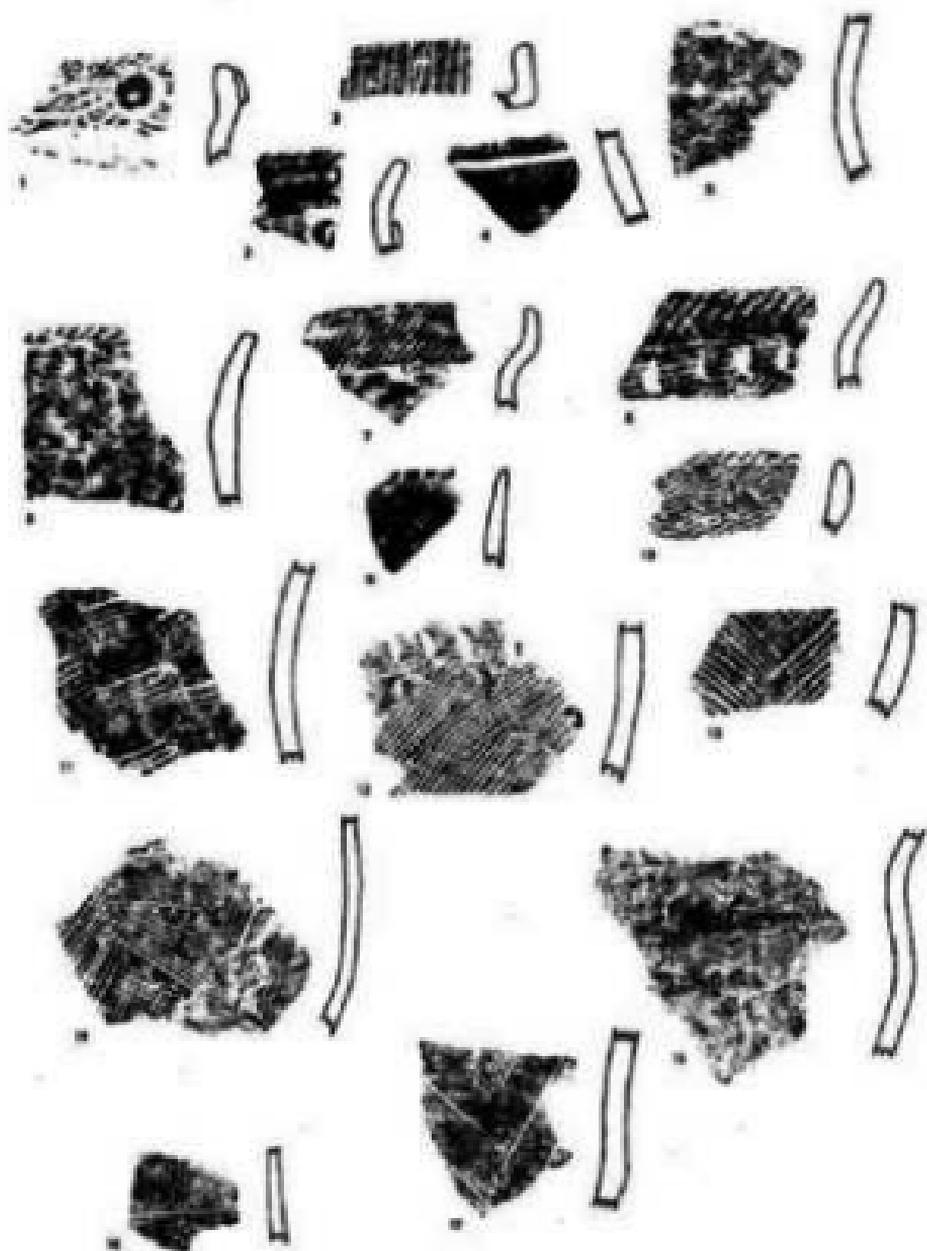
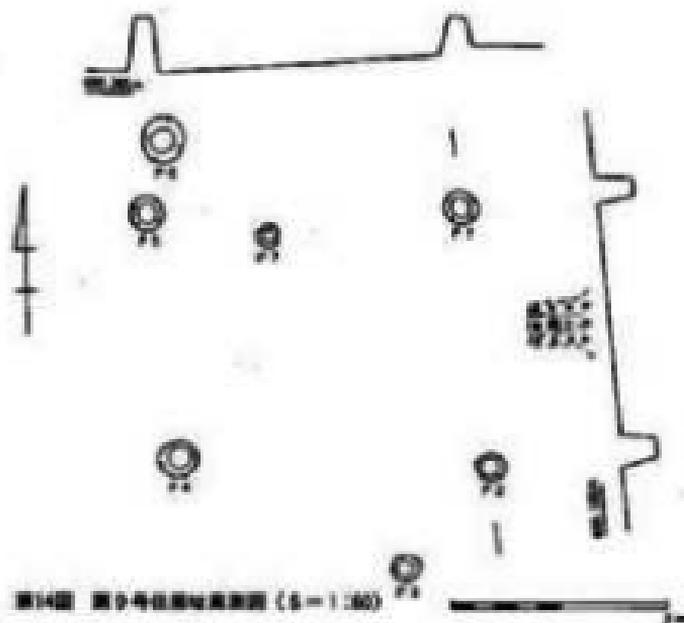


圖12圖 圖9号位腐植土薄切片(1~5) 圖10号位腐植土薄切片(6~17) (5=1:2)



第14図 第9号古墳址平面図(5-1:20)

第2部 古墳時代及び平安時代の遺構・遺物

1. 第3号古墳址(図15～18・図版3～12)

遺構 M1、M7に検出された墓穴式古墳址である。(図15)

改葬工事で床面を壊し、上層は覆土され層も削平された状態であったが、幸いにも西壁にキマド及び伊材、積土が残存していた。プラン、墓穴等は不詳で、積土部に伊の軸石とおもわれる石が2個ありその積度は1.5m×1.3mで、これをA号とし、1m距離で北側に置かれた0.4m×0.7mの石と積土塊のものをB号とした。

遺物はキマドA号の前面と北側に土層部が崩壊状態で多く検出され、南側床面に床板部断面や破断のハズクが検出した状態で出土し、かまど開口とおもわれ床面に埋内積形土層が上面を上出し積土した。(図16-1・図版3～10)

### 遺物 (図14-12図・図15-12)

遺物の出土は上述のように形、質とも多かったが、まず特筆したいのは「有孔陶瓦製粘土製品」(図14-1・図15-1)である。断面形は、厚7mm、横33mmの側壁長方形(図14-1)を呈するが部分により側壁円形を呈する。長さ47.5mmを測る土質製の筒状粘土製品で両端は切妻状に調整され、器壁は厚さ10mm～20mmを測る。片端と全面端が製成工具による縦方向のナブ刻痕が加えられ、端部に指状の欠損が施されている。全面と思われる扁平な片端中央部の中軸線に沿って厚7mmの円孔が4個、直列状に穿孔されている。

穿孔は製成前に加工されたもので器壁を貫通している。

内面は粗製で、約3mm内径の粘土層を輪組みして調整したままの状態(図15-3)である。用途は不明である。土器類では、壺3個、釜1個、杯2個、高杯1、瓶1個(図17-18-9・12)で、壺は片割が多い。

灰窯跡(図15-7～10)は4点あり、遺杯とハブクがありカマドの断片断面から出土した。時期は7世紀初頭前後と思われる。

石割(図14-5・6)(図15-6)は壺土が出土した。5は焼成済みの丁字割瓦の破断断片で、中央に直径9mmの孔をあけ、両端から両面に中央孔より放射状の不規則な文様が刻まれている。6は材質の粗製品の原石を打ち欠き断片としたもので、部分的に磨かれており、割痕が両面に沿って付いている。(以上片割記)

### 3. 墓号号位墓址(図15-20・図16-16)

遺構は、グラット石一帯に検出された石墓址である。プランは南北4.55m、東西もほぼ同じ位の方形の石室墓と考えられる。東側に墓号号位墓址があり、遺物の出土状況もおおむねその範囲の中にある。壁は直に近く角で40cm前後、先端で50cm前後を測る。床面は、小堀を多数に含んだ砂層を敷込んであり表面は堅く磨らず赤土に塗い、柱丈も不明である。かまどは西壁に2基あり、南側が小さく底面は70×70cmで石製かまどである。内面よりかめの破片が出土した。「B号」とする。壁外の埋戻し近くに10×25cmの圓形の扁平が置かれていて、その右側にあるかまどは約100cmの石製かまどで「A号」とする。内面にかめの破片が直ちこんでいる。遺物はかまど周辺に多い。東壁中央部に3ヶ所粘土が残存する。瓦製粘土製カマドの大小2基の併置は注意すべき事象である。

遺物(図20・図15・16-1)は多く、土器器壁8個、杯2個、高杯1個を数えるが、灰窯跡はなく、壺の量が卓越していることが注目される。壺は大型品8個、小型品4個の割合である。大型品は口縁の立ちあがりや底面状に大きくカーブし、口縁部から急激に膨み、最大部が中心に位置する器形を呈し、小型品は口縁の反りが少なく胴のふくらみも少ないのが特徴的である。(図20図、4～11)高杯は、脚の幅がわずかに広がる程度で、脚は底面端に傾きをそくらせ、わずかに高台状を形成する。(図15、1～3)いずれも伊勢赤土系灰土層の1号位、割+横中通り下14号位の出土品に類似し、数層の古墳時代末Y期終末、または奈良時代初期に比定でき得る。

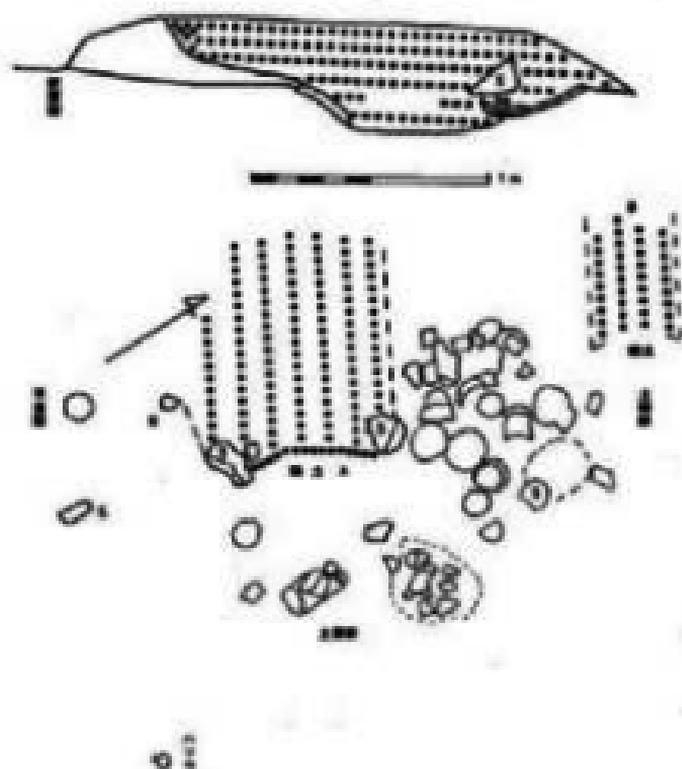


图16 图3号住居址カマフサ趾実測図

### 3. 第7号住居址 (図19・21 図説12)

遺跡 (図19 図説12) は、第5号住居址の南にあり、プランは東西で5.6m、南北は1m、北側で3m余保存しており形状は不詳である。発掘の要の状況よりみて方形竪穴の住居址と思われる。柱穴、かまどの位置は不詳である。第5号住居址東側に西る焼土がかまどの位置と考えられないこともないが、第5号住居址との関係もあり判断できない。北壁直下に壁が高まった遺構があり、その周辺に焼土がむかむかに認められるが、砂礫層で焼土の量も少なく石礫もくずれておりかまどとまよわかぬ。焼土敷が込まれた部屋が数箇所あり、室内敷、器具ともに壁面埋められた部屋が認められる。

遺物 (図21) 出土量は少ない。土師の形、甕の破片のみである。石器は3点あり、

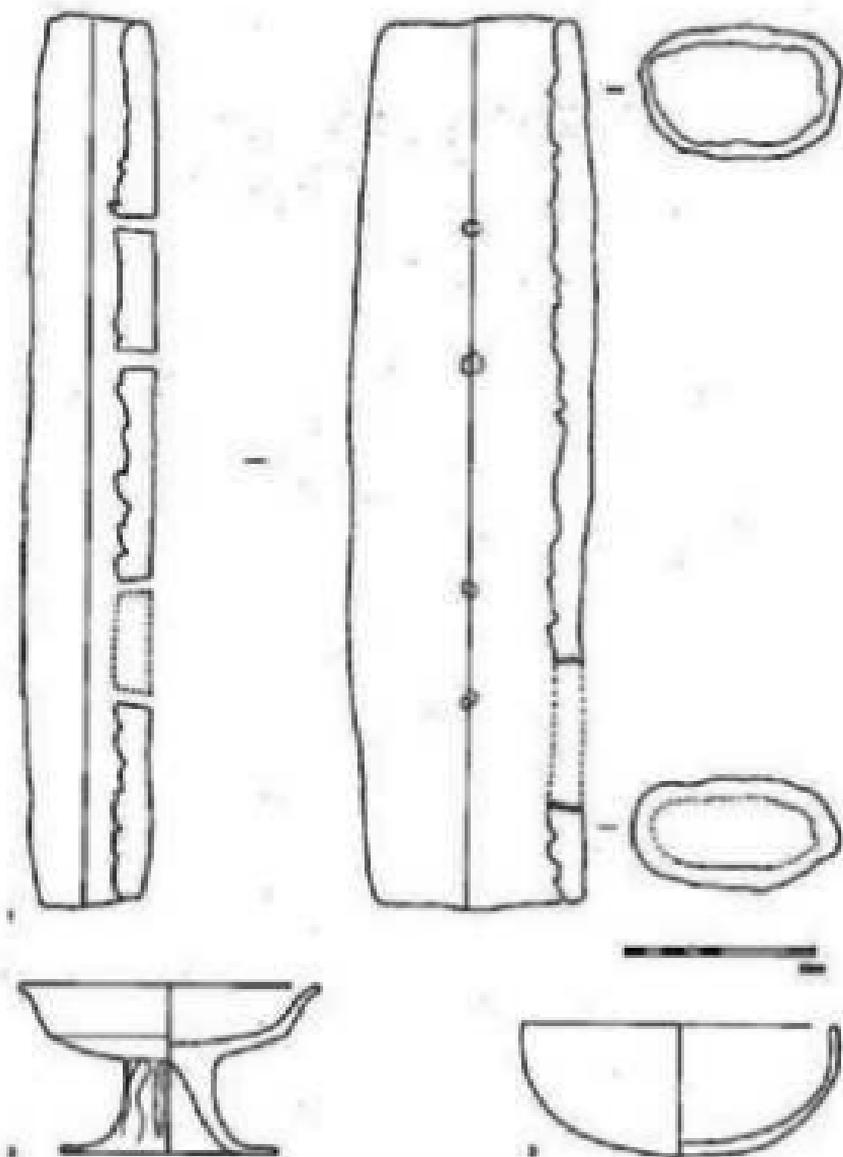


圖168 漢代青銅劍與劍首圖（1:2）

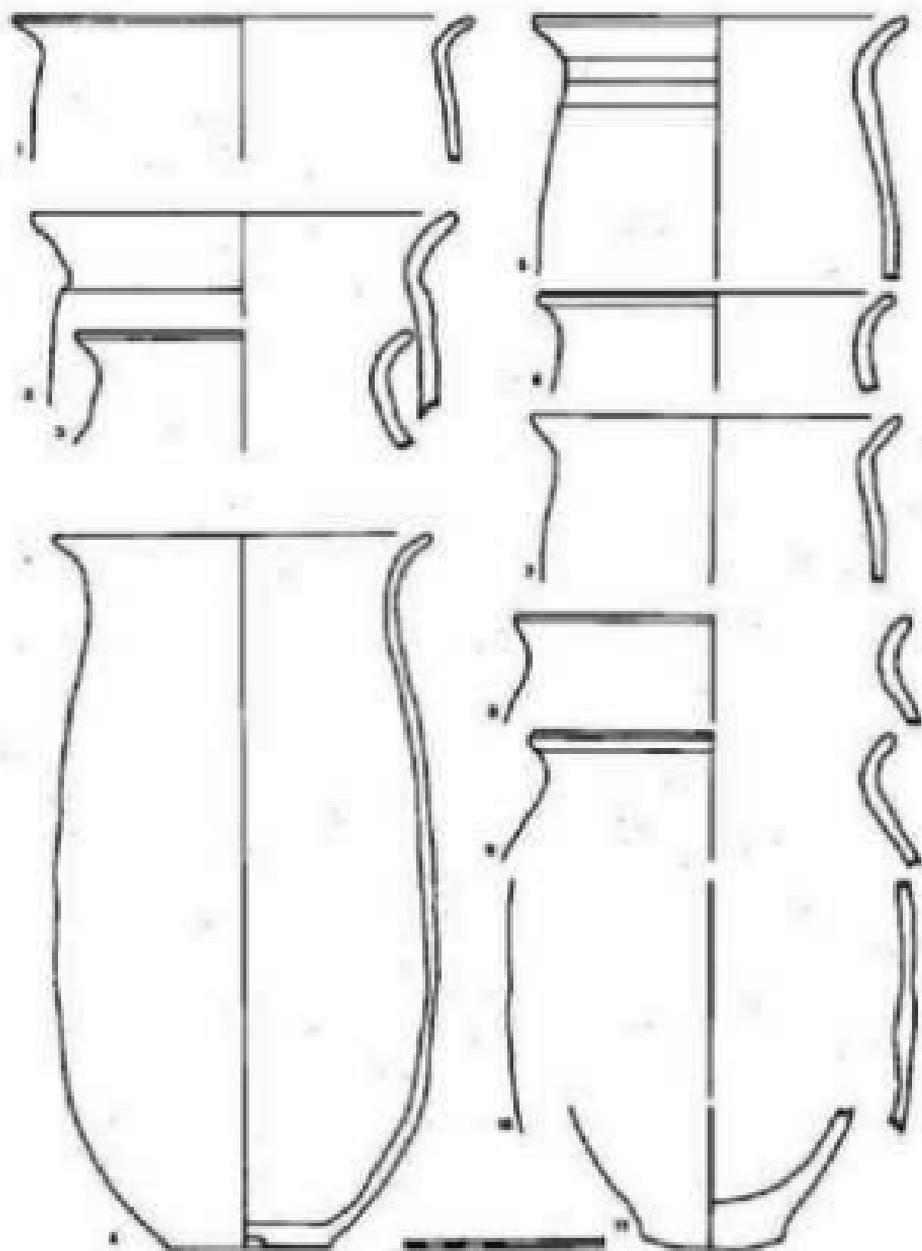


圖17 廣西梧州縣出土陶器 (5-1:3)

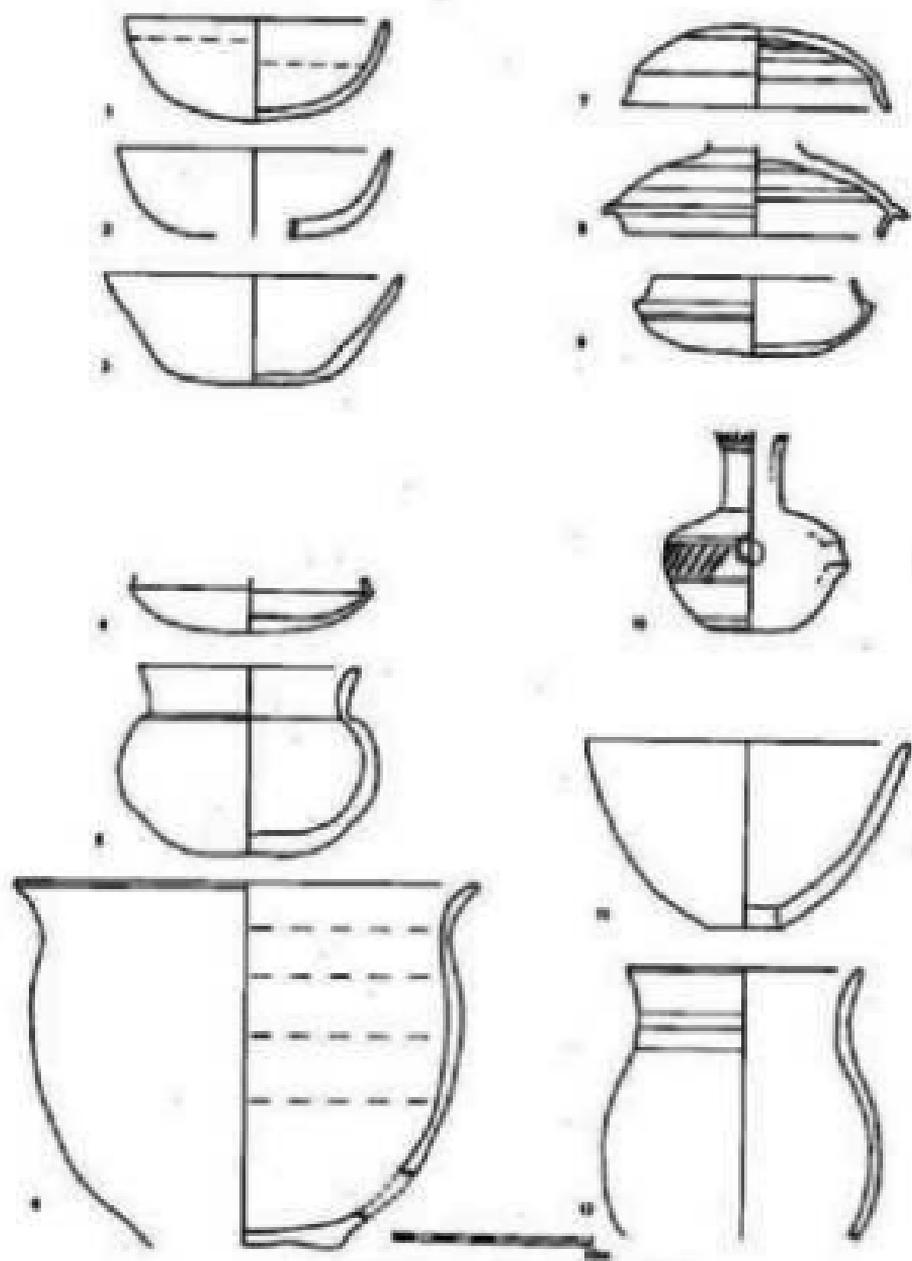


图100 第3号汉墓出土陶器 (1:3)

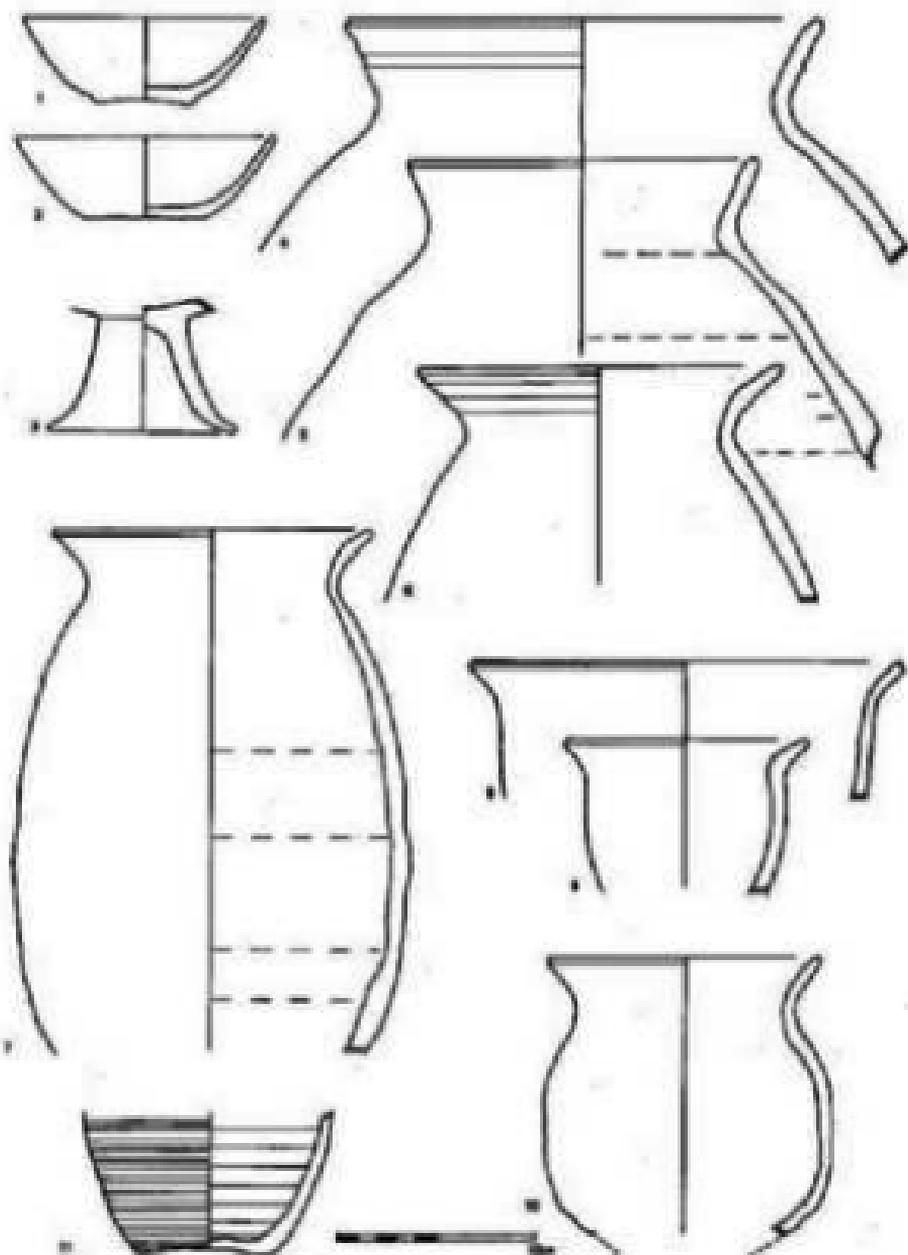
石 (21・10) で、一部が壁のように整い石を使っている。スプレイバー (21圖11) はチャート質で縄文時代の遺物である。

出土した土器類は、甕3個、杯3個 (第20図、21圖12) で残存数は目立たらない。壺大形瓦甗のもの2点 (第21図8、9) は、やや片断する口縁が直線状で比較的短い。胴部の膨みも短いのが特徴と思われる。小形甗はこれに反して口縁外傾度も強く膨みも曲線的である。杯は大形のもの2個、小形のもの4個であるが、前者は<sup>11</sup>層に近く遺物のみの焼灰色であるが、厚10cmの土面に本層底の灰層が露されており、祭祀用に用いられたものと想定される。両者は一定整理された痕跡があり、多量の自然石が遺物状態 (第19図、第21図) であったものが、オマド石器用の石が遺されたものであるうか、古墳時代第V層の新しい時期に相当する。

#### 4. 第5号住居址 (219 図版13)

遺構 本址は、第5号住居址と第7号住居址の中間、両住居址に直線して掘出された。プランは平形で、直交隅のコーナーの部分がわかるもので、表面は5号址、7号址と同一面上にあるもので、小礫を多く含む黒褐色砂礫層中に露出されており、土表面は堅く踏っておらず踏えにくい。柱穴等の施設は不明である。第5号址の東壁とおもわれるやぐら付近に西る30×80cmの礎石は形跡よりみてかまどの大木であろう。遺物は件ど見出し時期決定はむずかしいが、第5号址、第7号址よりは古いと思われる。





图六四 临汾县西村出土陶器 (9-112)

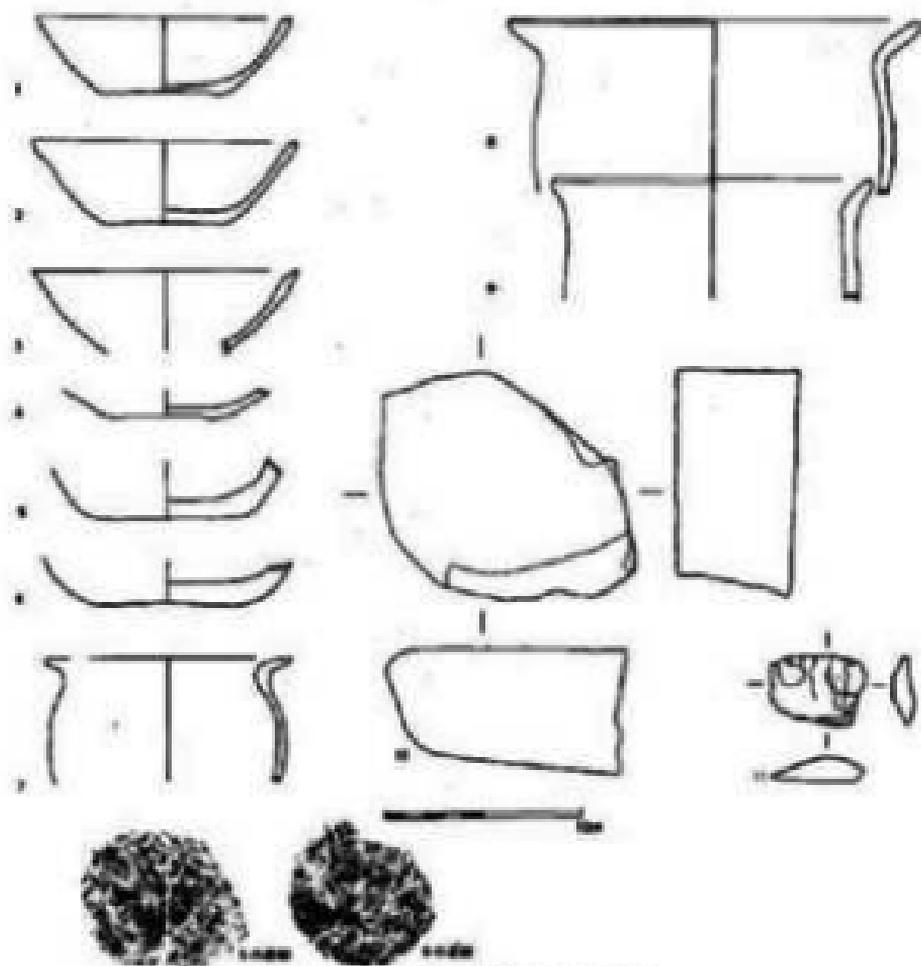


圖 10 漢代青銅器出土遺物 (比例 1:3)

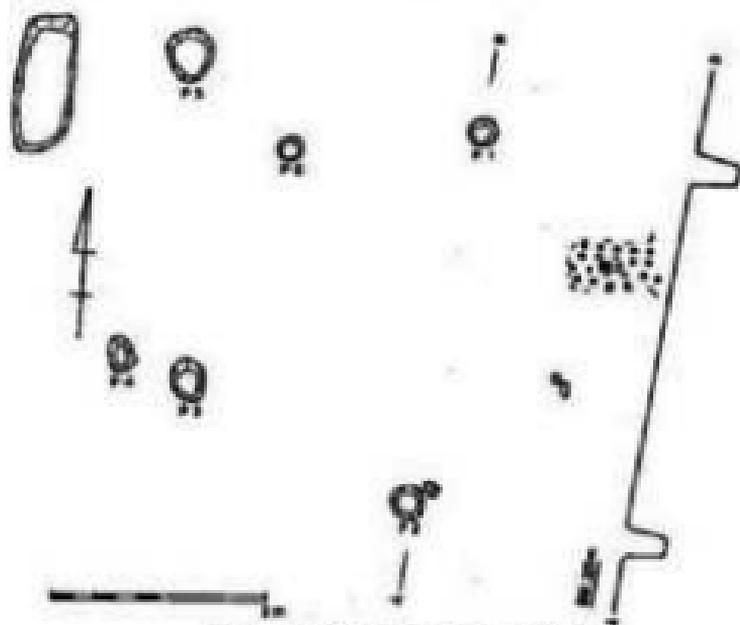


図16 第16号古墳の平面図（5・1:20）

5. 第6号古墳跡（図25・26 図形17・19・3・22-5・6）

遺構（図25 図形17-5） 本址は、ドリット人-12に検出された。今回の調査では北側にあり大半が埋没内になる古墳跡で、プランは方形副塔形で、南壁は角から角まで3.4mを測り、東壁は1.7m、西壁の1.3mを調査した。この地区は土層の傾斜の強いところで、遺構の保存状態は良い。掘溝は東壁で25cm、西壁で20cm、南壁で20cm、壁の位置は砂礫層を掘込内でありよくない。南壁も壁が傾げばくずれて北壁面の傾斜がむづかしい。かまどは調査区内に存在が考えられる。柱穴は3箇所検出された。

遺物は壁際に多く黄土中に弥生期の遺物が存在する。時期は3世紀である。

遺物（図26 図形17・19・3・22-5・6） 土師器高台付筒（21-5）口径14.8-15.5cm、高さ4.4cm、高台径1.1cm、高さ1cm、高台内は赤切り面である。内面内底で焼成良好。壺（27-1・2）共に口縁部である。

瓦葺筒（21-6）口径13.4cm、高さ4.7cm、高台径7.3cm、高さ0.6cm、ヘラ切成である。瓦は全面に赤褐色の瓦釉が刷毛で塗られていたと思われる。器底面の筒である。

石製紡錘車（27-5 図形19・20）砂切製で外径は長さ3.5cm、厚さ1cm、中央に径0.7cm前後の孔がある。

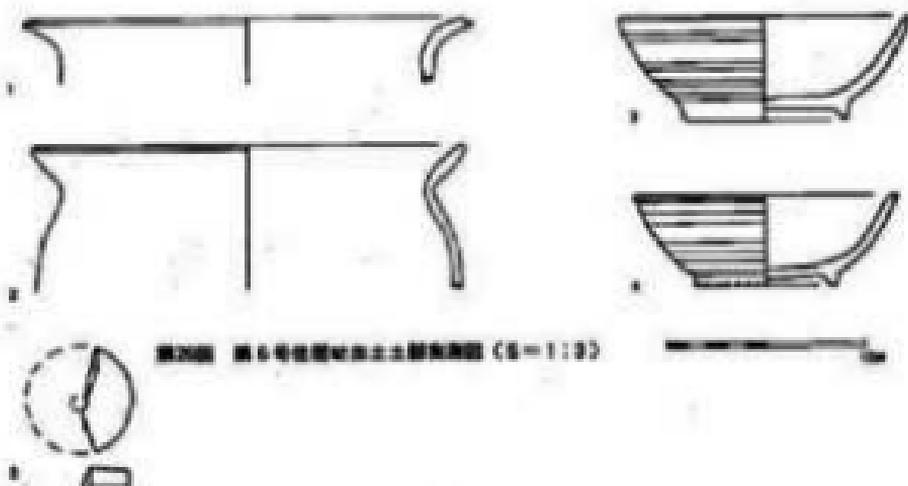


图208 晋中平遥县中平遥出土铜盆图 (G-1:3)

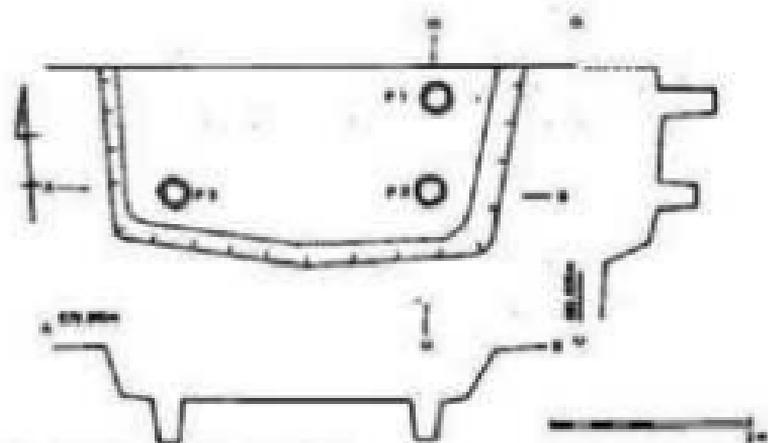


图209 晋中平遥县中平遥出土铜盆图 (G-1:30)

#### 6. 宮内省御遺址 (図23・24-2~4 図版16-4~7)

遺構 (図23) 本址はグリットロー7に検出された。戦後の改訂工事により床面近くまで削られており、かまどの焼土とピットのみを残す状態である。図3号位跡と重複しており、かまどは同一方向に1m間隔をもって並んでいる。

この位跡はプランは不詳である。焼土の左右手前にあるP1・P2は柱穴としては位置的によいと考えられるが、他のP3~P6は不自然である。P5近くの長方形の土坑は遺物が無く中の土層もP1・2と違って知り時期不詳である。

遺物 (図24-2~4) 図版16-4~7) この位跡地の遺物も各時期の遺物が混在している。

土師器は、(図24-2・3・4)がある。2は形状も台付の形(Ⅱ)で最近の出土例は、駒ヶ野中反貝遺跡、第2号位地、伊那の越前川内遺跡第4号位地がある。共に11世紀末とされている。

(図版16-7)は焼土から出土した白磁の鉢の破片である。香川県立考古学研究所の調査報告のご報告によれば、南前(12~13世紀)南方の産地で焼かれた白磁である。胎土は柔らかい感じで、ところどころに空間が目立つ。釉薬は長い筒土やにあった烏か狭い黄色を呈しており貫入がみだつ。

内面に片切彫の刺繍状が施される。厚さは4mm前後を測る。伊那産で最少ない出土例である。

#### 7. 第1号竪立柱式建物址 (図27・28 図版18-4)

遺構 (図27 図版18-4)

本址は、グリットⅡ-11の周辺に検出された。本調査の前に実施した試掘の段階で、土層断面のトレンチを設定。遺構の少ないと考えられるQ列を選んだ。調査上の理由からバックホーによる削土を行った結果張り過ぎの状態となったが、柱穴の底の部分に掘ることができた。

遺構は、3間×3間で、1間が柱穴の高から真まで4.8×4.7m間)12柱穴で構成する正方形プランの竪立柱式の建物址である。床面は砂質褐色土で柔らかく底層は認められない。

間隔は幅が50cmから70cmで、大きさに違いがあるがほぼ円形に張り込まれており、間隔は南側の4本が40cm前後、北側の4本は20cmから100cmを測る。時期は7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

遺物 (図28) 骨の刺繍の破片と、瓦割がP1・5・12から出土している。

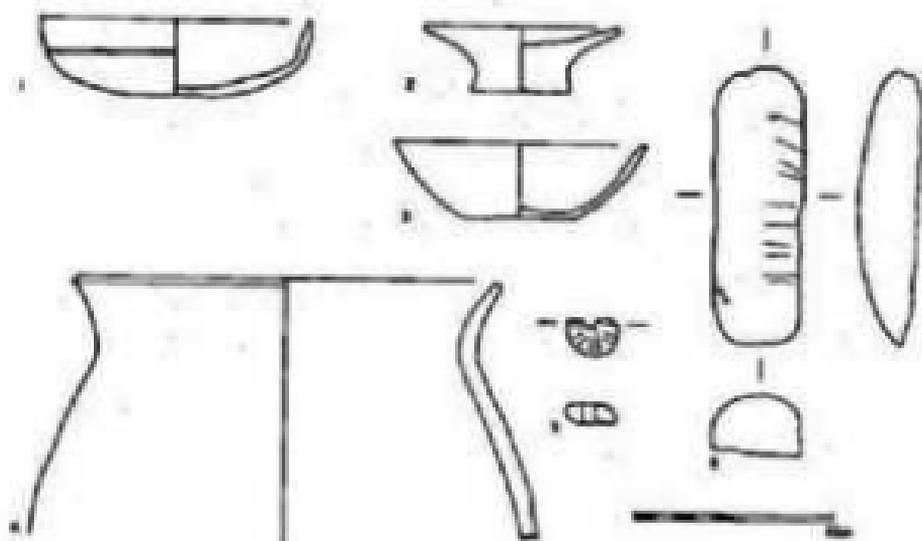


図24図 黒土器位器地 (1)・黒土器位器地 (2~4)・黒土器位器地 (5,6) 出土遺物

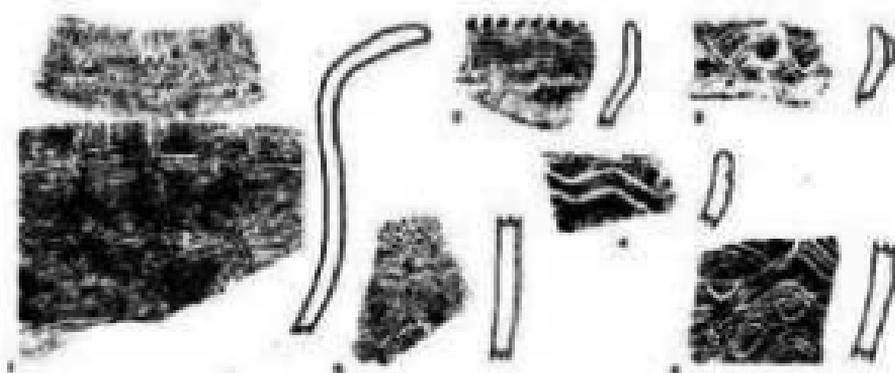
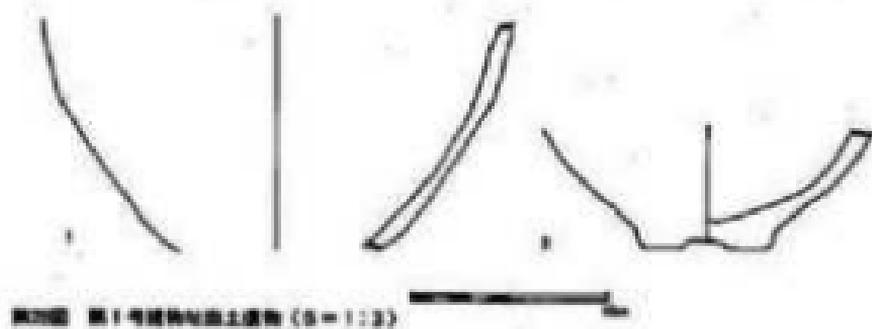
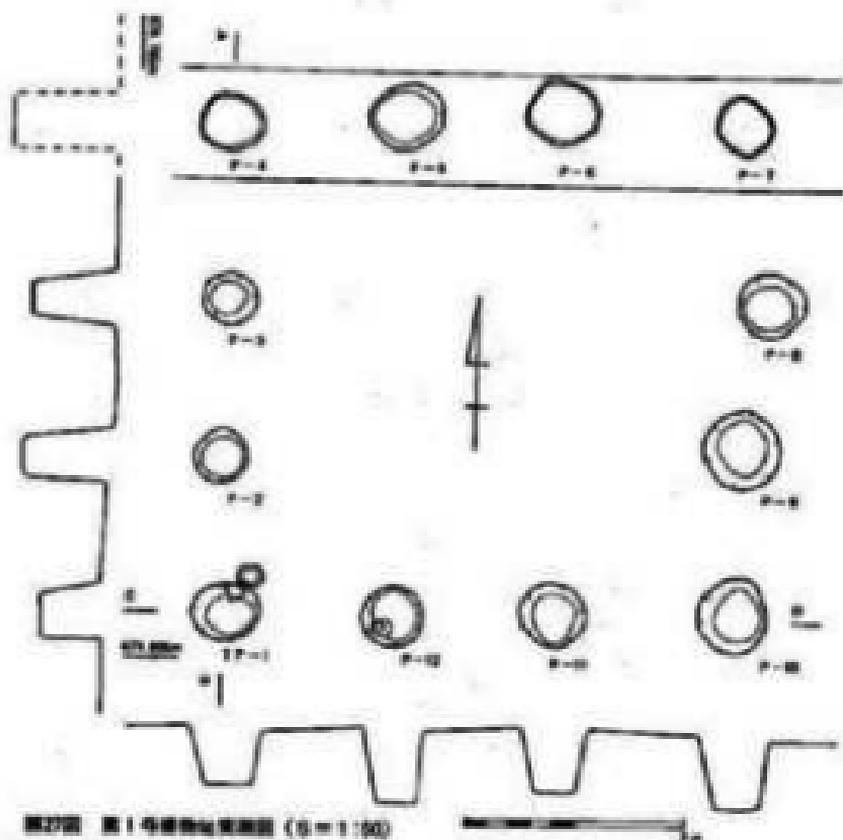


図25図 黒土器位器地 (5=1:2) (フリット)



### 8. 遺物出土位置 (図29-3-4 図版29-1・2)

#### (1) 土器 (図29-3-4 図版29-1・2)

図版29-1) は本館の地からの出土で、高台から立上りの部分で、口縁部に片口が付くこれ前の遺物である。

土器製造 (図29-4 図版9-1) この遺物は、北に隣接する瓦葺より製作中に出土した。口縁部が欠損している。器身高は25cm、胴部最大径25cm、底径は厚みがほぼしく製作時の径の計測はできないが7cm前後であろう。胴部に $8.5 \times 11$ cmの穴があいている。穴の位置を観察すると、内面から外に向かって力が加えられた状態が遺物面にみられ、穴が穿けられた後も使用された痕跡が認められる。(この遺物は有蓋式のところに今1点の蓋と共に保管されている)

#### (2) 石器 (図29-5-4)

石器 (図29-5-4) 2点出土している。製作土を製土している時点で出土した。共に硬砂岩製の打石斧である。遺物に付かないので時期は不明である。両式遺物土器片を伴った。

(3) 灰坑を有する器 (図版22) 長径30cm内外の器身内腔状の横切面に、径の長さ7cm内外の青銅製状態を識別してある。埋蔵地点より20m北方の発掘製作中に深さ6cmほどの土中から出土した。一定期間をもって位置し、数量44個が保管されている。土器製造 (図版19) と同地点から出土した。(埋蔵者有賀大造氏)

### 9. 土器製造の糸切歯について (図版22-3)

土器製造終了時、輪轆から切り離す時に使用する道具、即ち糸について土城市在住の今井敏夫先生に伺ったところ、お忙しい中にもかかわらず次のような御教示を頂いた。

「瀬戸員邊地方では、圓みご (にご) を作るのが古くからの習慣であったが、現在ではこのような圓みごを使用されている陶芸家はおらないとのこと。現在は織物の糸糸を使用しているようで、織物の糸では圓みごのように明確な糸切歯を示さないようです。

その糸の製作について、圓の輪をすぬいて、その環の部分をしていて取りを掛けて作ったようで手轆轆による製造成産が解るとこのような糸作りがなくなるようです。

糸が短くとこわく (かたく) なるので、糸に依って短かくして使用する。織物と違ってこわく (かたく)、したがって糸切に使用した場合共に明確な糸切歯が現るようです。」

(文責 木下)

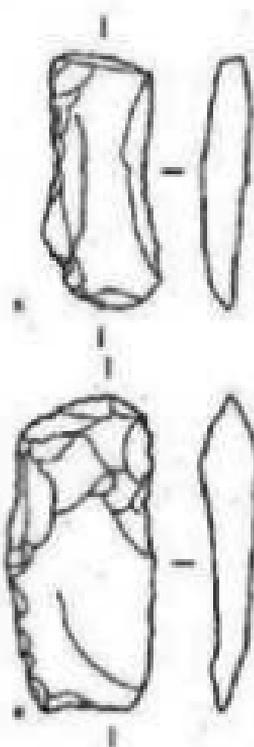
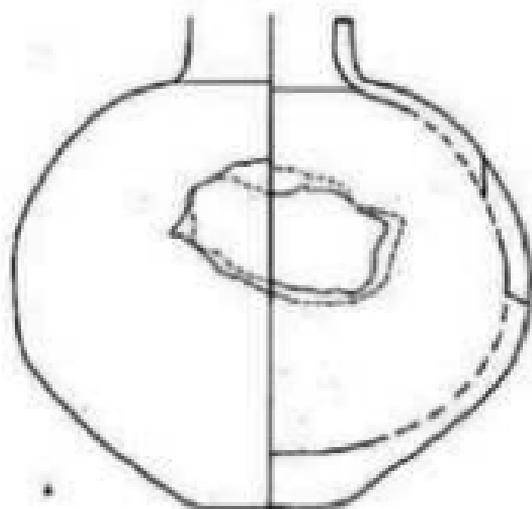
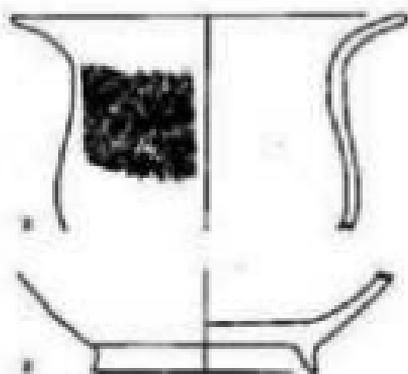
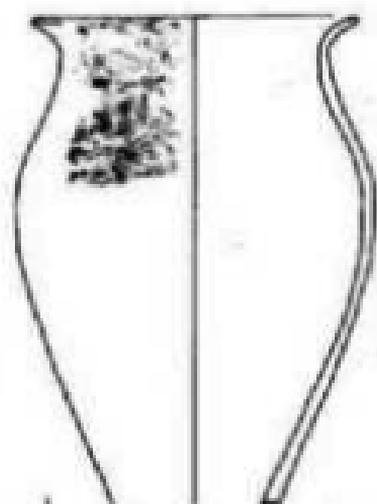


圖208 遺物出土遺物 (G=1:2)

## 第V章 総 括

北旭丹遺跡の一回100㎡（南北約70×東西25m）の北西角を掘出した状況は、以上に詳述した通りである。河原段土層の狭い範囲にしかならず、4つの時代に定まれた住居跡が層層的に存在し、各時代を通じて、重要な遺構、遺物が出土したことは、大塚原北旭丹のレンガムとして、東山の一角を示すものである。幸いに東麓部に墓地として残されている遺跡はその中心部であり、広範囲であることを喜びとしたい。

今次の発掘調査で検出された遺構は総計13基、その大部分は竪穴式住居跡で12軒、高床式倉庫1棟であった。

時代別に分けてみると、弥生時代中期4棟、古墳時代前期4棟、別に高床柱式倉庫1棟、平安時代前期3棟である。いわば古代の室の時代別階層帯の様である。この層が古代人の生活の場として、最善の条件を整えていることを示している。それは弥生時代以来、人々の生活空間の基盤がその生活でありつづきにあったからに違かならない。

北旭丹遺跡は、北麓段丘の北縁に位置し、眼下に式大な葛輪の天竜川沖積扇を見おろすことができる。弥生人はここに家を建て、眼下の天竜川岸の臨地帯を耕し、木田を採集した。弥生以来2000年間この営みは次第に発展して今日に至ったのである。

『R北麓段丘の東から天竜川に至る水田の下には弥生時代以来、各時代の水田が積み重なって埋積されている可能性は極めて高い。』

今回の発掘調査によって判明した北旭丹遺跡は、上伊那の過去の発掘事例に類しても、民族的な事象が多いのに驚くのである。その歴史的な重要性と貴重性の二、五に比べてまげてみたい。

### 1. 弥生時代中期の遺跡について

弥生時代中期遺跡の発見は、上伊那初の事例である。弥生式文化とは、とりもなおさず水田農耕の生活文化であるが上伊那への普及は他の地域に比べ今まで確実に把握されていなかった。

即ち、弥生文化は、紀元前500年頃、北九州の一角に発祥し、次第に東方へ波及し、近畿の各地、そして畿内平野に定着し、更にここを基地にして中部山岳地帯や河原に拡散していくのである。長野県域では、天竜川沿岸を北上し、いち早く伊那谷盆地に定着する。

第一波は瀧尾の赤坂文系土器や、東海の濃賀河系土器を使った人々の存在によって明らかされた定着した。その跡は濃賀農村や鹿木村阿島の遺跡に見出される。また豊しく赤坂文系の色彩の強い堀式系の土器は上伊那にも定着を遂げている。それが爾々後赤坂村式遺跡である。

第二波として、濃賀川系と水神中系を併せ持つ堀式土器（下伊那黒島品村）を持つ文化が上伊那郡中川村の河原段遺跡に流入し定着する。

第三波の百俣式文化は上伊那を通過して岡谷市の諏訪盆地で発着する。これが有名な定

の埴式土器文化で、同層遺跡から瓦片を出土しており注目される。

このような遺跡の中で、弥生中期後半の時期になると、前述の埴式土器やこれから派生した北沢式文化<sup>22</sup> 範囲以て分布するが上伊那の地には北達せず、いわば真三度、真四度とともに上伊那は空白地帯と目されてきた。

ところが今回の調査で土器を伴って住居址跡が発見されたことは既述の概念を覆すものでこの点まことに意義深いがある。竪穴式住居跡は4軒だが、概念ながら地層の調査工事により、復元、破壊が及ぼされ、第1号址と第4号址のみその被害から免れ、住居構造の把握を知ることができる。この住居址は、築造時の南半部に傾倒し、北側に壁が崩られており遺跡崩壊と思われる。北沢式土器を伴う第1号址(図版3、3 図4、5)は、一辺4.8mの方向に近く、四角穴で東壁中心部に煙突跡が設けられその初現を示す。

埴式土器を伴出した第4号址は長軸4.3mの小型長方形を呈し四角穴で、中央北寄りに煙突跡が設けられていた。(図10、11、12、図版6-2、13-1)。

第1号址出土の土器は、壺、甕、甕鉢、高脚甕鉢(図版3)、(ニ)テア土器3点を伴い、折口壺を数える。折口壺、小形合付壺には両部を定したものがあり、蓋文は、折線瓦文、散点式瓦文、散点式による散線文、斜線文、杉線文が折部・口縁部、口唇部に施される(図版6の下)。散点全面に瓦文や点文にへず瓦紋線文によるコの中重ね文様を施す、合付壺(図3、図版4)がある。また赤色塗彩の壺や甕鉢、漆器文、瓦紋文が施された甕が多い。またこれとは別で第9号第10号住居址出土の土器のように陶器に瓦器の破砕スや口縁に瓦文等がつけられ、横走する瓦紋スや斜い散点瓦紋スが横行する1群(図版7、図11、12)がある。

これは埴式方式に類似しているが、また一面天瓦器外式や高戸蓋の要素を持ち、両者の影響を受けた土器と思われる。以上の住居址跡は、同層住居址の最北部を示しており、これに引き続いて南移する地層に築造の中心部が存在すると見られる。今後の調査を期待したい。上伊那地域の縄文から弥生への変遷を物語る極めて重要な遺跡と思われる。

### 3. 古墳時代の遺物整理について

古墳時代の後期の埴内郡和歌は字群初見の例である。後後期の開田工事により包含層を掘り出された第3号住居址は、幸いにも西壁に造りつけられた石芯柱土製の甕(以下 ヤマトと記す)が掘られ、甕口手前の河原から壁にかけて3段階の上層部が順次状態で出土した。(図版8-1-1~5) 図版別記すと、甕口手前に埴内郡和歌土製品、その次にエボン形、その西側段次に壺1個、壺1個、甕1個、甕2個、高平1個、(図版9-12-1、1、4) 瓦器群の遺付埴3個、埴1個、ハソウ1個、(図13 図版10-1、4、7、8)、壺土中から石製石玉であった。出土した土器類、調査器具は古墳時代前期末の所産である。

土器群の中にある瓦製のエボン形甕等は、伝統的な瓦製のものに加え甕の模造状態で、古事記のヤマトノオホツチの島の國人塚を想わせ、祭祀状況を窺わずものと考えられ、加えて石製製造品に近い蛇紋岩の質を加工した勾瓦、瓦蓋のハソウ、遺付埴、土師の甕

等は祭器としての性格が強いことからみて祭祀遺物として扱ってよいであろう。近年、カマド型口瓶から出土した厚肉黄赤土製品は（図19 図版11）、高さ約3.5m内径の径僅1.5m、壁厚7mmを測る。器厚1.5m、片面的中輪筋の中上部に径7mmの穴が4量成列して穿れ、表面はへら磨きが施されるが、内面は輪筋迄のままで僅かに黄褐色が認められる程度である。全面黄褐色を呈し、器底は良好である。同類品は全国的に見てもその出土数は最少であり、僅かに大塚前河村遺跡出土の10数点が知られ、その他赤良岳、赤塚山等毎に単品で出土している。但し本品のように穿孔は認められず、全く無孔である点が見える。表面の中輪筋に沿って直列する4箇の孔は、祭祀の際に遺物を固定させるためのものと考えられる。特にカマドの神として古くは延喜式第八に記述される筑前府平野神社はカマド神奉祭の宮宮社として知られるが四座（今木神、久度神、古洞神、比売神）で四神を祭る。本品の4孔は四神の遺物の孔と想定することができ、出土位置がカマドの壁の口であり、壁は又片筋に磨かれたものであることが想定されるのである。現代においても実効されている下伊勢郡熊野遺跡の重要民俗資料（国史文）「熊山の遺物集」についての「熊立神楽」のカマドは黄赤の又片筋に紅土層を覆き黄褐色を呈する事例があり、類似の形状と思われるのである。

また、本品におけるカマド型土器は1000個体を越えるが、いわゆる横カマドは僅かに3例であり非常に珍しい。この点、畿内を中心とする西日本各地における出土数と比較する時、大きな差違を呈している。この差違が7世紀以前における層位であるとすればカマドを供えた渡来人の出自の差によるものと考えられる。熊野宮と熊野の遺物の如何を問う問題と共に熊野の古墳文化の流変を把握する上に重要な問題であろう。

また第3号住居址、第5号住居址に見られるカマド型器は、横カマド型土器の構造に対応する構造であり、平野神社祭神に見られる久度神、古洞神祭祀を意味するものと思われるが今後の研究に待たれたい。また第7号址は廃棄前に整理されているが同類と思える。

ついでに、平安時代住居址の存在にも触れておきたい。第6号住居址、第10号住居址は平安時代前期の住居址である。第3、第5、第7号住居址のように7世紀前期の層位に比べその大きさを拡大したようである。また赤良山製石場跡の見見は産片ながら北側のループとしての「原村」とよばれた中世大ムラの文化的経済的高さを示し「原村」信仰圏の一画を担っていたことを示す遺跡として、歴史的文化的にその価値は極めて高いものがあり、今後村付敷における文化財保護の立場からの調査に期待することが大きい。

### 3. 古墳時代前期の土器について

古墳時代方式土器類出土についてである。

今次発掘調査地点の北方200mの位置に位置する有賀氏墓地の掘削の途中で出土し調査された黄赤土器が同家に保存されていた。加えて同じ出土地点から径の1m内径の平石44点が調査保管されているが、黄の厚位置と平石群の位置は同位置であったとの報告者の証言がある。

この土器（図20-4、図版19-1）は、胴部は球形（径26cm）を呈し、胴部は径8cmの

厨下であるが立ち上りから折損していて口縁部断面は不祥であるが恐らく平字口縁になり覆られたいわゆるパレススタイルの壺形土器であろう。厨下に瓦文はないが、平縁に施かれた帯状土部に朱塗が施されており、今や鑑定しているがその特徴が認められる。恐らく当時、関西または東海方面から搬入されたもので、その器蓋は古灰山遺の埴輪埴輪土によってこの地にもたらされたものと想定される。初平平ではこの時、県内最古の大塚古墳、弘法山古墳が築造されており、初期古墳文化の隆盛への波及は明瞭である。同壺土器は、伊勢谷では飯沼市成光寺の飯沼遺跡から出土しており、弥生時代遺跡の性格が北九州と対峙し得ること併せて重要な研究問題を提示している。

またこの土器の側部装飾は意匠的な穿孔加工で、人面を表現し呪性の権威を伴つと想定される。前述のように瓦土の灰山遺製平石埴輪の存在は注目すべきことである。出土状況は製作中の埴輪発見であるが、およそ100平方の範囲に一定の間隔で配置されていたという。

遺跡状況ではなく、配置状況であり、一種の配石遺構と思われる。その中に3点であるが、縁辺部に浅いレリーフによって青黄瓦文を焼き出したもの（図版33）があり、無蓋または瓦性が感じられる。施文された自然石（河原石）の配石遺構とすれば、古代祭祀の「磐座」（いわくら）となり、赤坂遺跡土器は神化した神への神げものとなる。

遺跡民の祭祀として配置を記るのが遺例であるので、このような配置が可成である。いずれにしても上伊勢地域への古墳文化の浸透ぶりを示す極めて貴重な土器である。同壺の遺構が近くに存在する可能性が窺へ。

本誌ながら本誌を了らざるに当たり、岡戸遺跡土器品の出土例等について御教示を蒙った奈良大学教授水野賢好先生。本遺跡の調査に多大の予算を費された地主の有賀誠氏および読者委員会委員について注進された鳥取県委員会文化課水野謙博主事、村教育委員会社会教育課松岡英太郎主事をはじめ村文化財保護行政関係各位に深く御意を表す次第である。

（調査機関長 林 茂樹）

【註】

- (1) 岡ヶ原市教育委員会「瓦神穴遺跡」
- (2) 大田保「中川村河原遺跡の一部出土土器について」長野県考古学会誌10 1971
- (3) 神村通徳「北草遺跡」
- (4) 宮沢雄之「飯沼赤黄川遺跡」長野県考古学会誌所収 1972
- (5) 飯沼 賢「古墳、伝説の古代」日知新聞 1992
- (6) 中村 隆、他「灰山古墳群の調査」『知名見』大塚南教育委員会所収 1990
- (7) 片岡國直、他「雲月祭」南信濃村村史誌山内版 1976
- (8) 水野賢好「遺形一 日本古代魔物の周辺」古代研究24号所収 1992
- (9) 宮坂光昭「千歳湖社評」諏訪市教育委員会 1991



# 圖 版

图 1



图 1 远景 南方 2 号



图 2 近景 南方 2 号



標本土狀況



標本



標本地位圖 西方

图版 3

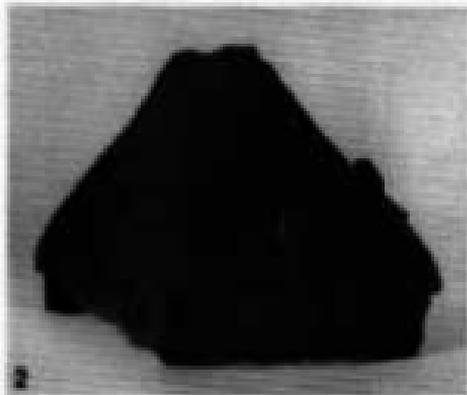
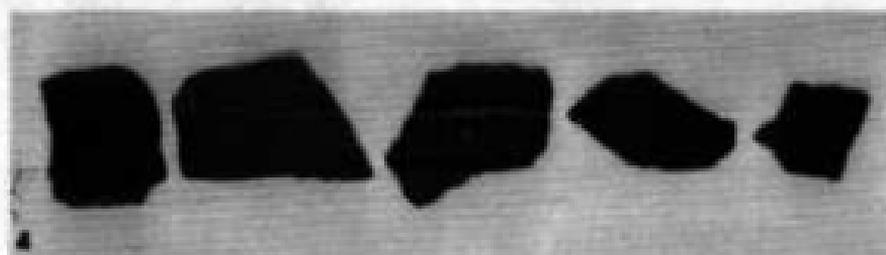
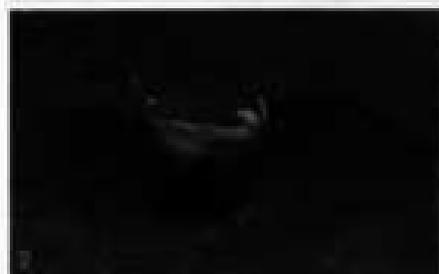


图 1 号纹饰陶土土器

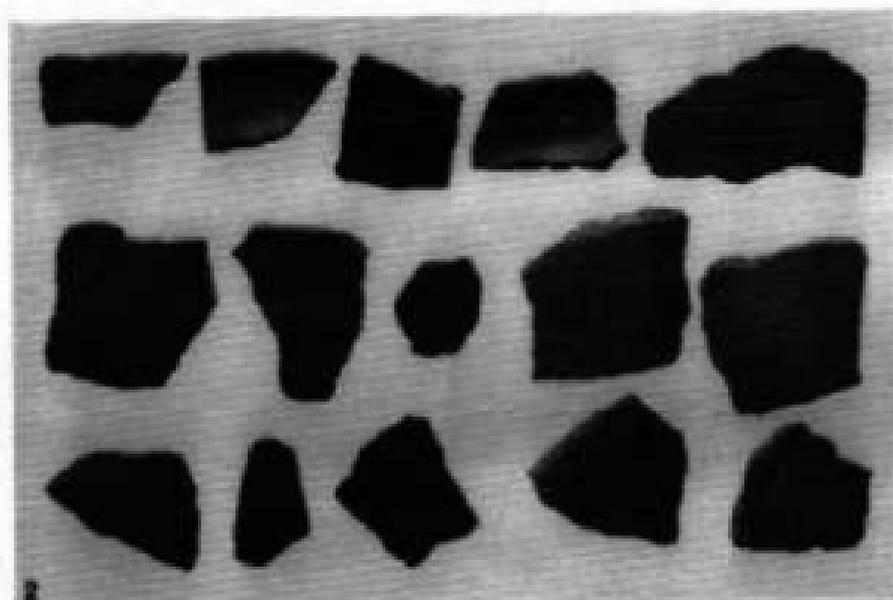
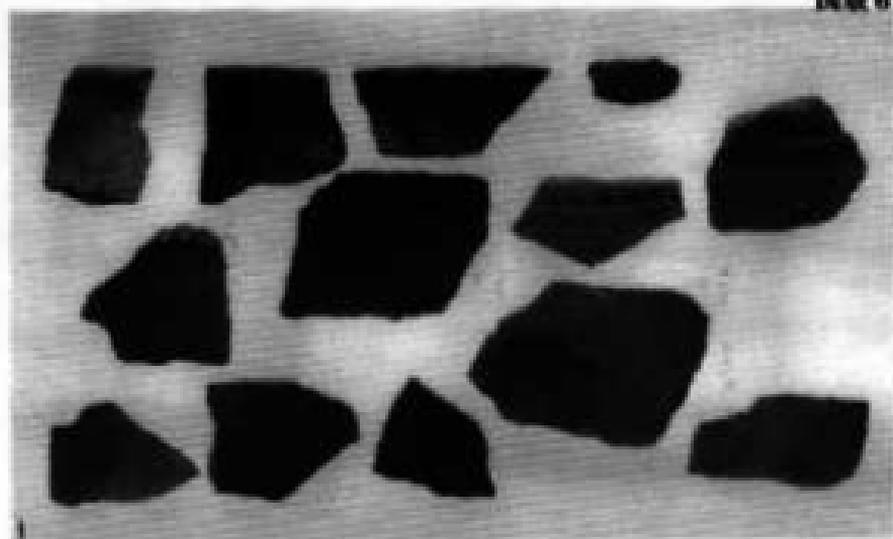


1. 图2号纹饰片 (上) 东方J1 (Y) 瓦上土团

图 3

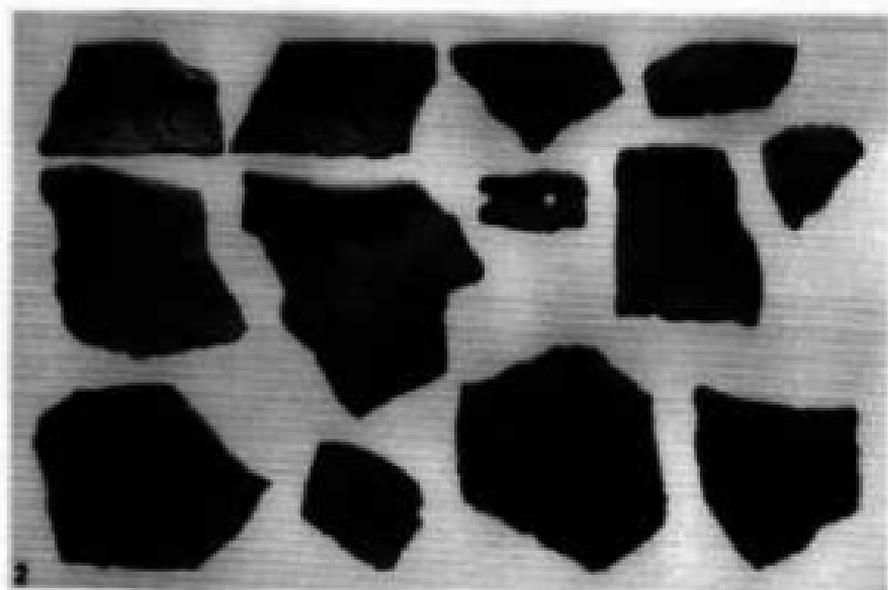
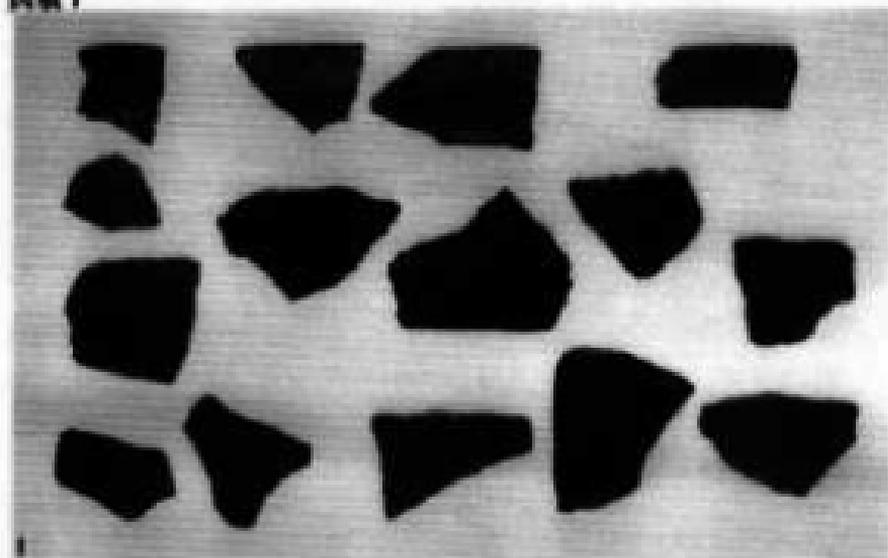


1. 图4号位原址 2. 化石 3. 化石 4. 石质土状况



1. 第1号位原址出土片 2. 第4号位原址出土片

图版 7



1. 距母岩层以上层出土碎土照片

2. 距母岩层以上层出土碎土照片

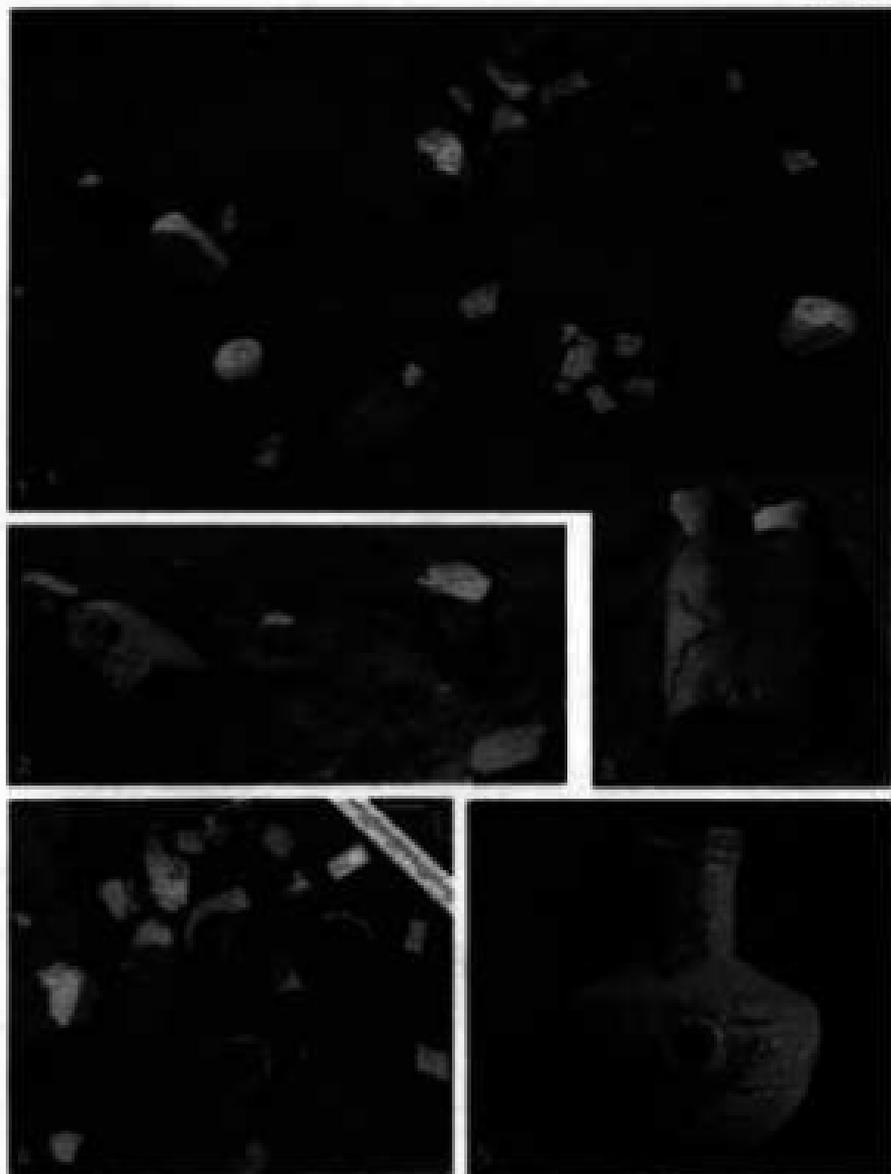


圖3 各地異種赤土状況

1.赤土の概観 2.開口 3.前列開墾土製品赤土状況 4.赤土の粒状面 5.横断面ノ赤土状況

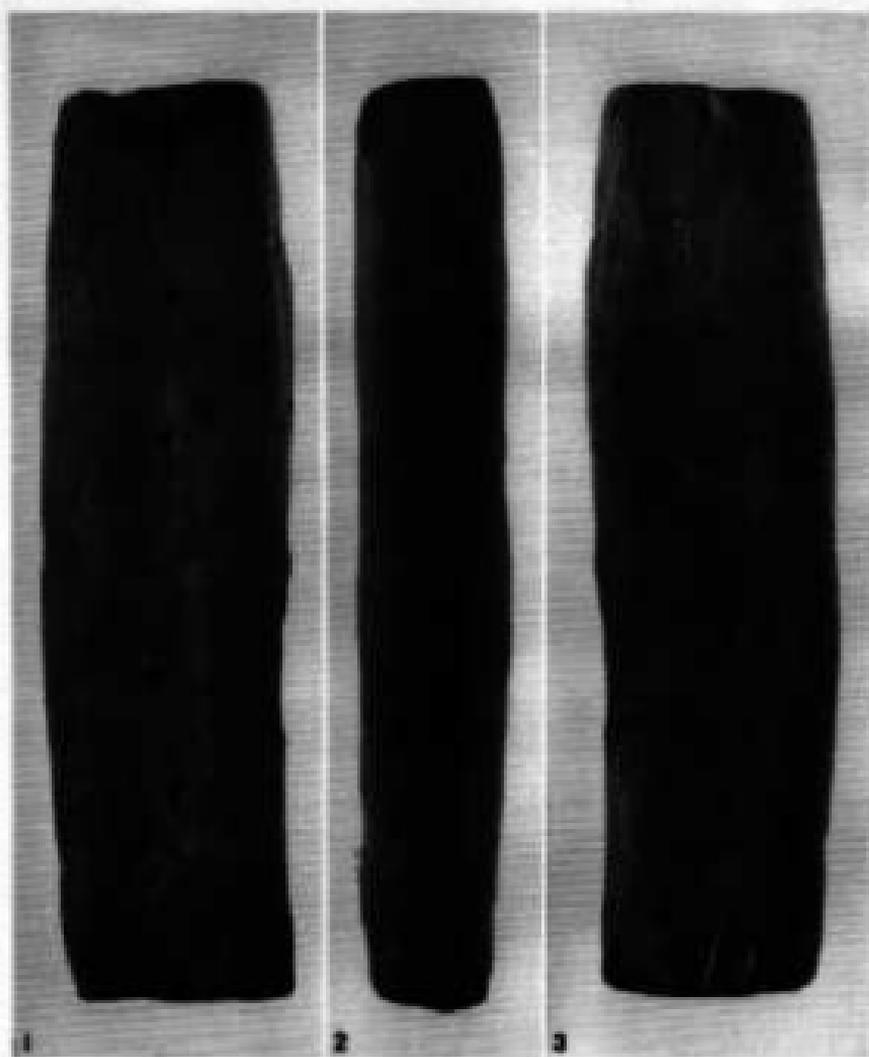


图 3 号位器以高土质内筒制土器品

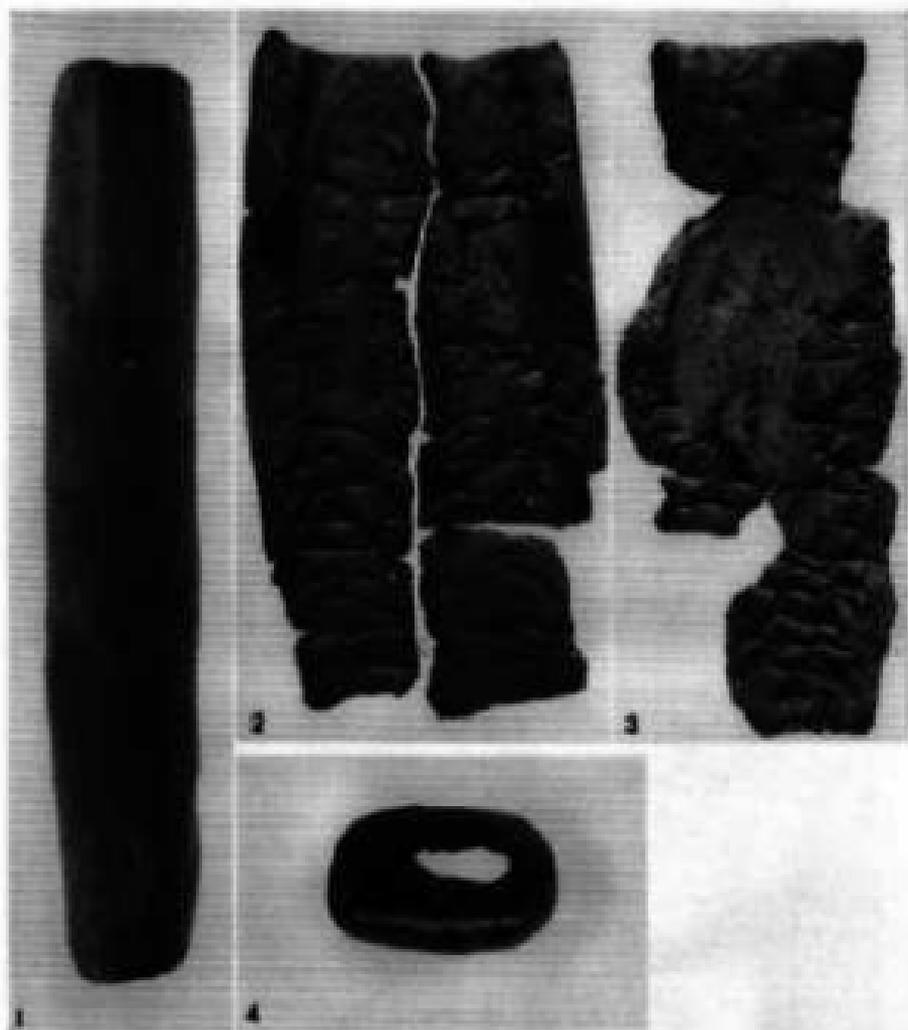


图3号位遗址出土的陶器 1. 筒 2. 片 3. 片 4. 环

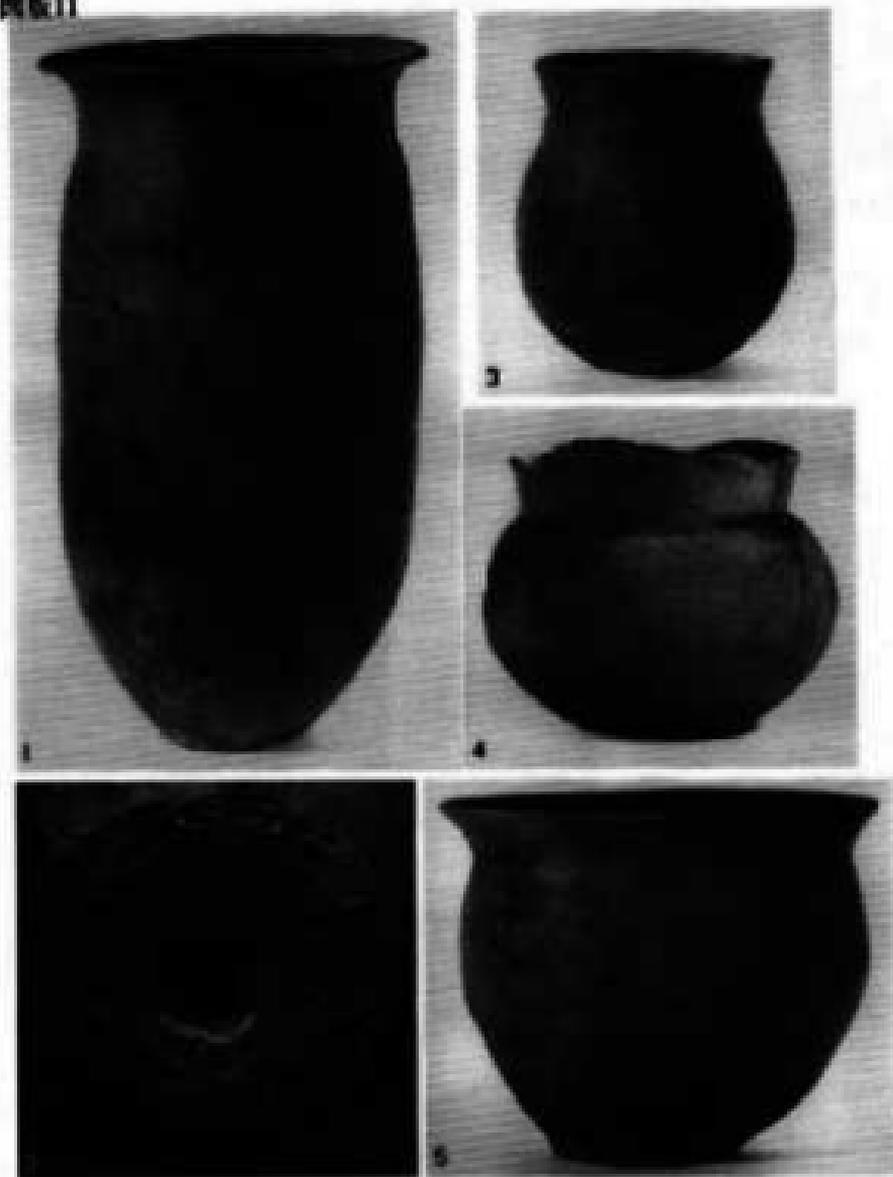


图 3 考依里山出土土器 2. 10 厘米

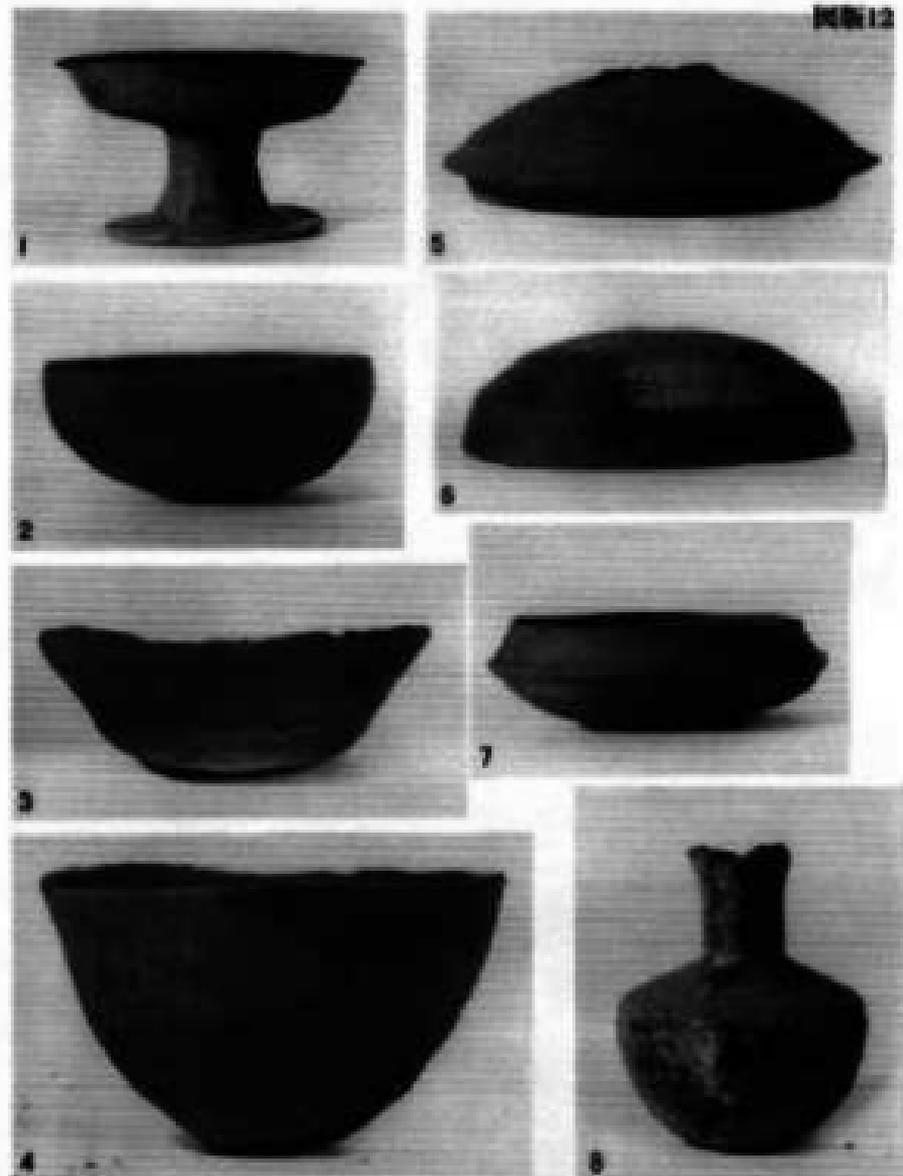


图3号战国时期出土文物 1-4. 土碗形 5-6. 碗形器

图版 13



1. 图5·7-8号植物化石 2. 图7·8号植物化石(7号A面)



图5 各地原植物种状况

1. 5号草甸地上状况

2. 5号草甸地裂口面

3. 6号草甸地

4. 7号草甸地剖面

5. 8号草甸地土壤层上状况

图版 15

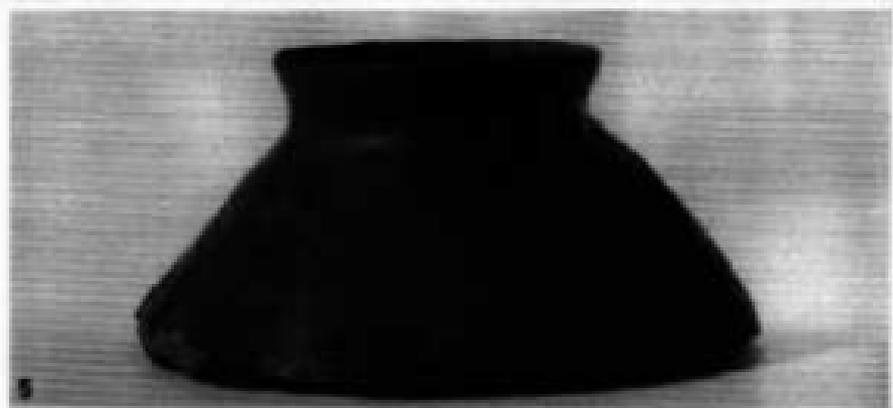
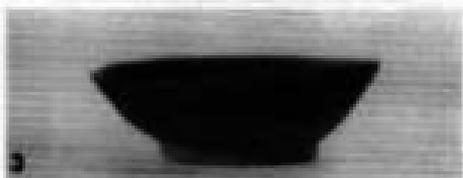
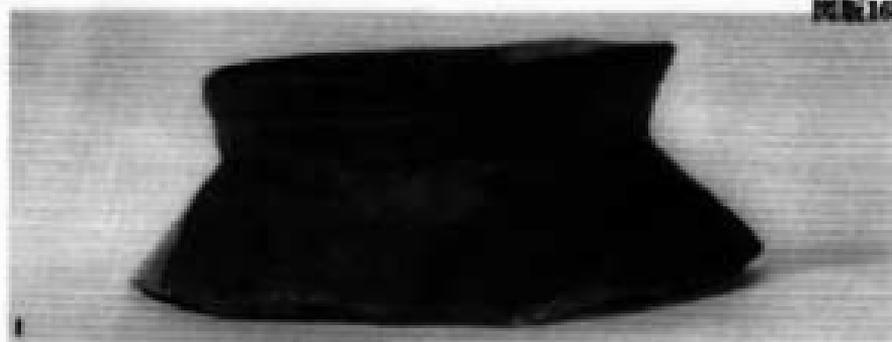


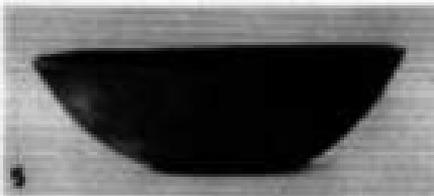
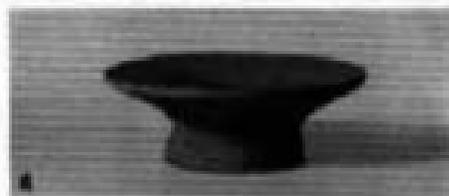
图 1 号在原始社会之土器



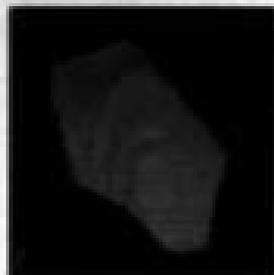
1 第3号遗址原始出土土器



2、3 第10号遗址原始出土土器



4、5 第10号遗址原始出土土器



6、7 第3号遗址原始出土土器

图版 17



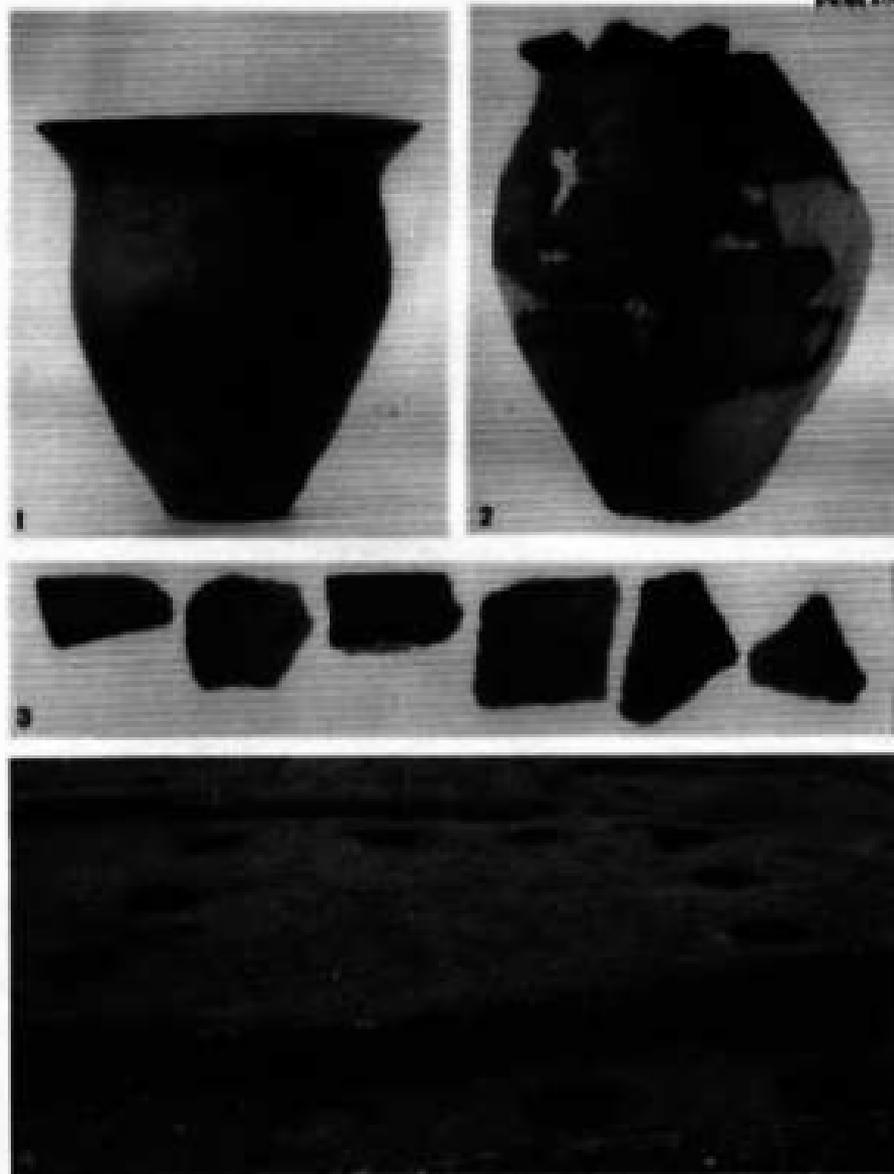
1



2

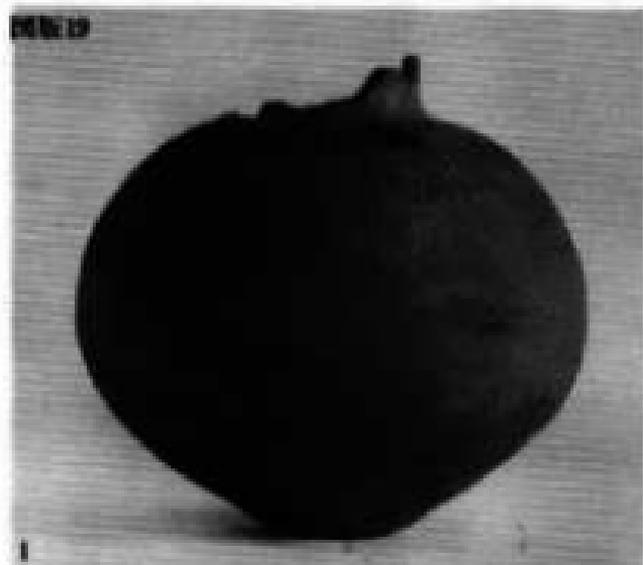


图 1 号化石的复原图



1. 第4号位陶器残片 2. T-7/T-10出土 3. 第7号位陶器残片 4. 第1号位陶器残片 北方2号

图版 10



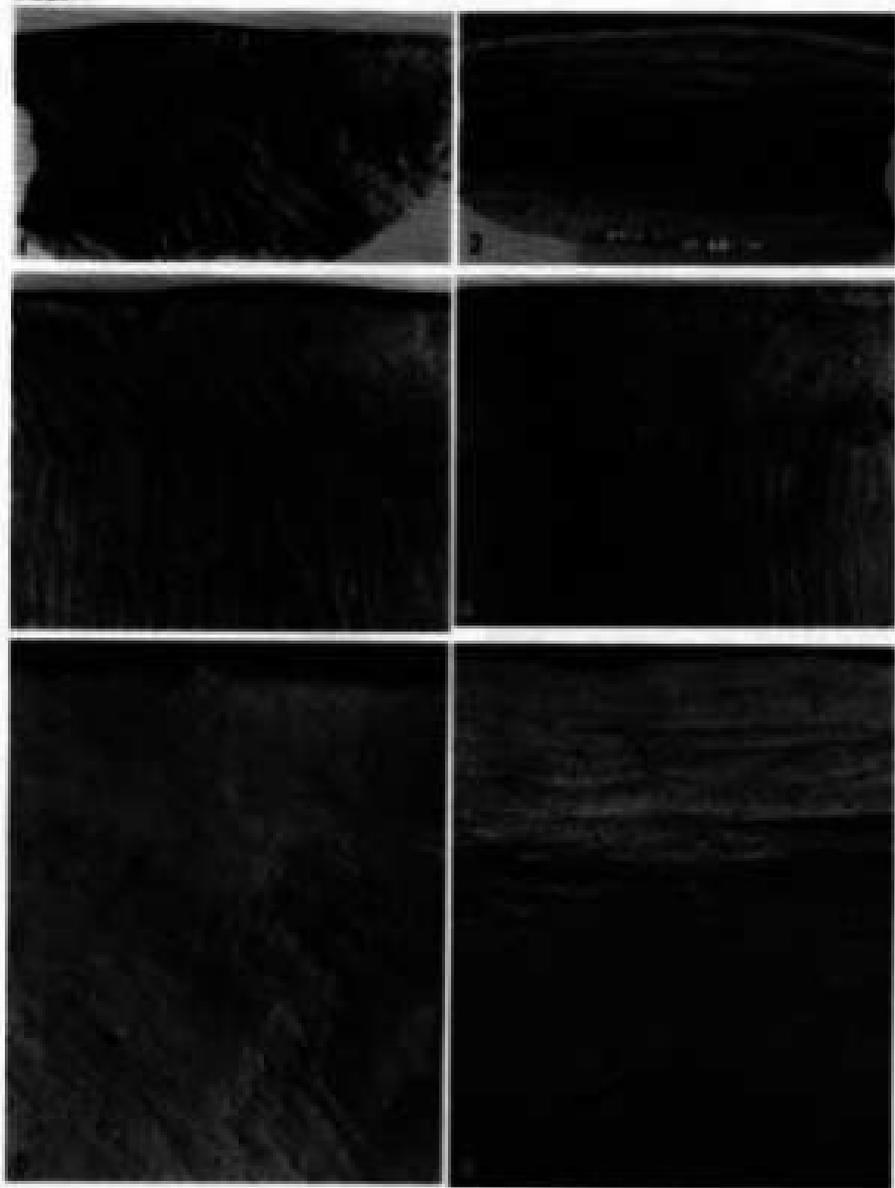
臺灣外島土壤

1. 2. 調查區與樣地之土壤 3. 第4号位地土層之上部剖面 4. 第7-1号土層生土區之剖面

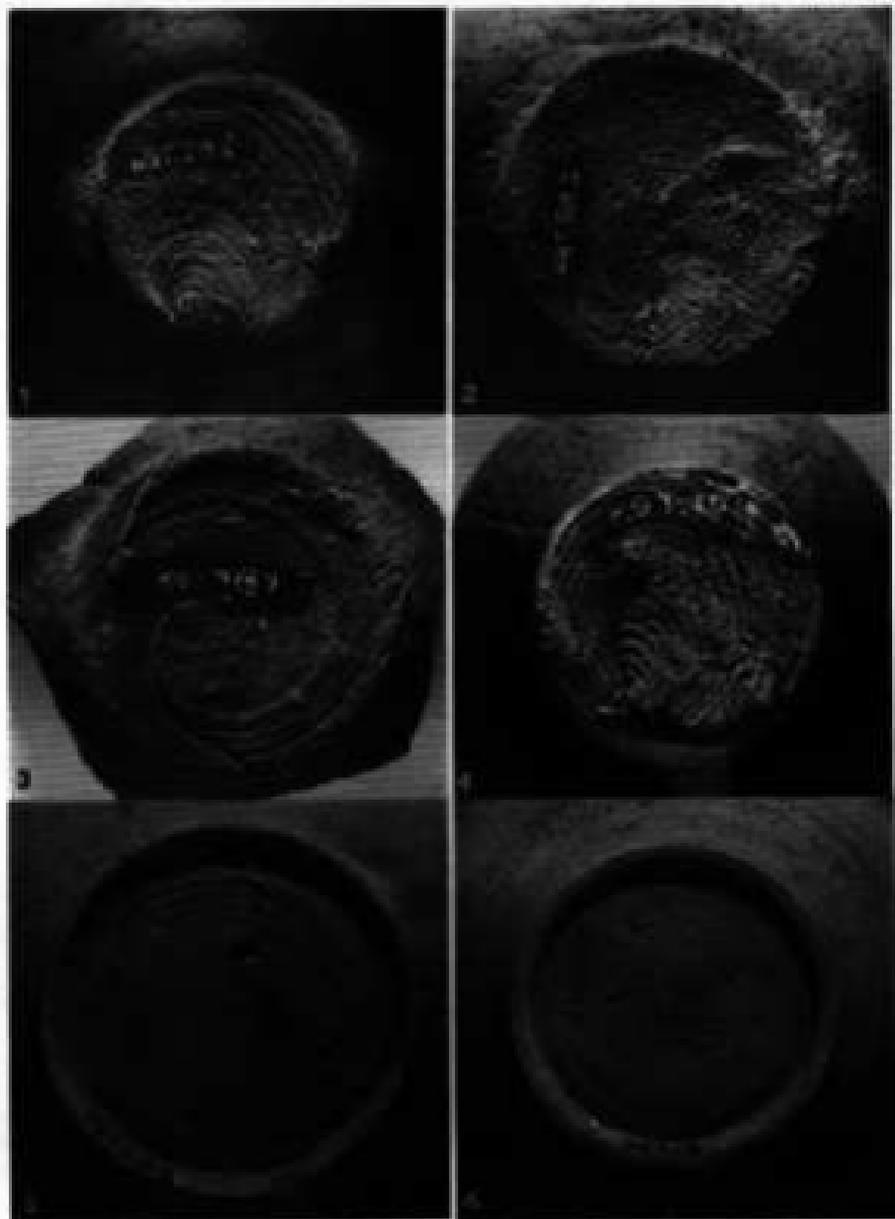


上海自然史博物馆藏 24. 内型

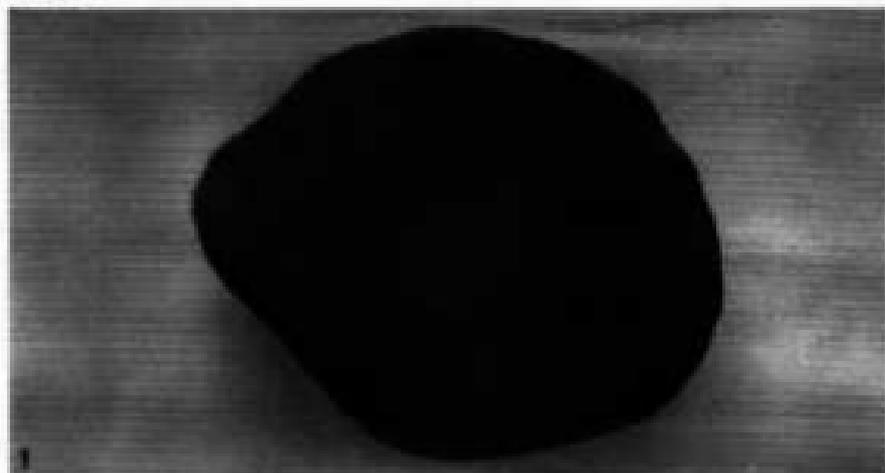
圖版 21



北極海島土中細菌顯微鏡 21. 內面



1~6. 木質部組織 5. 環輪・環輪



新海渡文線刻圖（1900年土神宮土瓦に出土。3は長さ12cm）

## 北 垣 外 遺 跡

北垣遺跡調査に伴う縄文文化財調査報告  
調査報告書

平成4年11月 発行

編 行

長野県上伊那郡佐久間町教育委員会

印 刷 西小松製本印刷

